
死人喰いの鬼

藍川いさな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死人喰いの鬼

【Nコード】

N2537Q

【作者名】

藍川いさな

【あらすじ】

親代わりだった祖母が亡くなり、天涯孤独となった由比。父親だと名乗る男の元に引き取られる。

しかし一族の視線は冷たく、さらに孤独をつのらせる。

一族の女主が亡くなった通夜の夜、由比は一人の青年と出会う。しかし、彼は一族の死肉を喰らう鬼だった。

「わたしが死んだら食べていいから、話し相手になって……？」

孤独な少女と、死人喰いの青年の儚い恋物語。

序章

時折姿を見せる墨染め衣の青年の姿を、わたしはいつの間にか目で追ってしまっていた。

今にも消えてしまいそうに儚い青年の姿を、闇にまぎれて消えてゆくその姿を、何故いつも目で追い、探し求めてしまふのだろうか？

ほら。今日もいる。

葉桜になった桜の大樹。そこに青年が隠れているなんて、わたしはとつくに気づいていた。

「さて、と」

勢いづけようと、わたしは縁側から降りて下駄を爪先に引っ掛ける。

裏手に回り、小さな井戸から水を汲み上げ、手桶いっぱい水に満たす。水が零れないようゆっくり運ぶのは、かなりの重労働だ。

普通だった雑草と言われてしまう野の花も、手を掛けなければならぬ観葉植物も、この庭ではわけ隔てなく植えられている。だから、この庭は一年中賑やかだ。

六月を過ぎた今頃は、紫陽花や露草が元気よく咲いている。春に植えた朝顔も添え木にきれいな緑の蔓を絡ませ、もうしばらくすれば大輪の花を咲かせてくれるだろう。

「暑い……」

日差しのせいだろう、少し眩暈がする。そのまま縁側の上に身体を横たえた。大きく息を吐き出す。眩暈が過ぎるのを待っていると、突然額に冷たいものが触れた。

誰、と言い掛けた言葉を飲み込んだ。

汗で張り付いた前髪を払い、ひんやりとした手のひらが額をやりわりと覆う。気遣うように触れる冷たい指先。

わたしは知っている。骨張った細い指。そっと触れる冷たい指の感触を。

「ありがとう」

無意識のうちに呟いていた。その瞬間、指はびくりと震え、額から離れてしまう。

「……さん、由比さん」

耳のそばから声がする。この声は。

「たえ、さん？」

「どうしたんですか？ お気分が悪いのですか？ 冷たいお水でも持ってきてみましょうか？」

矢継ぎ早に言葉が飛んでくる中、わたしはようやく瞼を開いた。妙さんが心配そうにわたしの顔を覗き込んでいる。

妙さんはこの家の女中さんだ。十三の頃からこの家で働いているらしい。

ふっくらした丸顔で、笑うと目元に皺ができる。妙さんはひどくそれを気にしているようだけど、わたしはそんな妙さんの笑顔が大好きだ。

「お布団を引いて少し横になりますか？」

「大丈夫、大丈夫です」

慌てて身体を起こすと、安心してもらえるように笑顔を作った。

「ありがとう。ちょっと眩暈がしただけですから」

「本当ですか？ どれどれ……」

熱を見ようと、妙さんの手がわたしの額を覆う。妙さんの手のひらは、少し乾いていて、ほんのりとあたたかかった。

妙さんが背を向けたのを見計らって、桜の木陰を盗み見た。だけど、もうそこには青年の姿はない。

つい見守っていてくれるのだと時折勘違いしそうになる。

違う。あの人は見守ってくれているわけではない。

ただ、見張っているだけ。わたしがいつの日か死んでいくのを待っているだけなのだ。

自分に言い聞かせるように、頭の中でくり返す。

そう。あの人は鬼で、わたしはあの人の餌。

それでいいと望んだのは、わたし自身なのだから。

序章（後書き）

以前に同人誌で出した作品ですが、よかったら最後までお付き合いくださいませ。

一 嫌なお通夜

わたしは妾の子だ。

母は吉原の遊女だったので、父親が誰なのかわからない。ひとりわたしを産み落とした母も、出産と同時に命を落とし、それから十五年。わたしを育ててくれた母の母、祖母も半年前に亡くなってしまった。

母と同じように遊郭に行くしかないと思っていた矢先、自らを父と名乗る男が現われた。

郡司何とか一郎、太郎だったかもしれない。あまり興味がなかった、聞いてもすぐに忘れてしまう。

とにかく、その郡司なんとか一郎、もしくは太郎は、気難しそうな初老の男の人だった。

横浜の方で、何か商売をしているらしい。

フロックコートに黒帽子。口元には白髪雑じりの髭をたくわえ、いかにも裕福そうだ。

母の馴染みのお客だったらしいけれど、とても遊郭に通うようには見えない。

でも、本人が言うのだから間違いないだろう。そう思うことにした。

雑多な下町の一角にある遊郭で、一生檻褸雑巾のように使い捨て

にされるよりはましだ。そう思ったからだ。

でも祖母という人は、わたしが郡司の家に来るのを、最後まで反対していたらしい。

そして皮肉にも、わたしが引き取られて三日後、彼女は亡くなってしまった。

（ほら……あの娘だよ）

（ああ、どうりで）

（母親が遊女だと……）

（よくもまあ、ずうずうしくこの家に）

（おルイさんが亡くなったのも、あの娘のせいじゃないの）

お通夜の席では、お坊様がお経を唱えている間も、背後から刺すような視線をいくつも感じていた。

別になんとも言えない。陰口なんて言われ慣れているから平気だ。

形式どおりに手を合わせ、焼香を終えると、挑むように弔問に訪れた人々に向き直った。

一瞬、空気が強張るのを肌で感じる。わたしは澄ました顔で、畳に手を付き、深く頭を下げた。

親族の席に静々と戻った途端、ひそひそ話が静かに波が打ち寄せるように聞えてくる。

耳を澄ますと、わたしの素性から始まり、ひとり息子がちっともすっかりしていないとか、祖母は相当がめつい人物だったという話まで耳に入ってくる。

かなりの資産を溜め込んでいるものの、息子夫婦に渡すでもなく、墓場の中まで持っていくつもりだったようだとも。

亡くなった祖母という人が、どんな人かまでは知らない。けど、お通夜で悪口を言わなくてもいいと思う。

だから金持ちは……なんて言うと、貧乏人のひがみに聞こえてしまっただろうけれど、実際貧乏人だったのだから仕方がない。

嫌なお通夜だ。故人の死を悼む人間はいないのか。

金屏風みたいな法衣に身を包んだ三人のお坊様。立派な広間にずらりと並んだ喪服姿の人々。庭にも溢れてしまうほどの弔問客。

まるで黒蟻が甘い汁を啜りに集まってきたようだ。

辺りに白く立ち込めた焼香の煙を吸い込んでいるうちに、段々胸がむかむかとしてきた。多分、少しきつめに締められた帯だけのせいじゃないと思う。

もう駄目だ。

非難の視線を覚悟して、わたしはふらりと立ち上がった。

ずっとここにいたら、吐いてしまいそうだ。わたしが気分悪そうに口元を押さえると、誰もが嫌そうに顔を背けて、見て見ぬ振りをした。

もう嫌だ、帰りたい。

でも、今のわたしに帰る場所などない。
もちろん、この家にだって、わたしの居場所はない。

一瞬、遊郭に行った方がましだったと思いたくなる時もあるが、それは隣の芝生が青く見えているだけだとわかっていた。

……水が飲みたい。

井戸があるかもしれないと、裏庭に回る。

思ったとおり井戸はあった。古いけれどちゃんと使える。しかも、そこには小さな庭があった。

草木や野の花が自由奔放に咲き乱れていた。可憐で小さな野の花が一面に散りばめられているようだ。

まだ低い黒い枝の木は、多分桜だと思う。細い枝には固くて小さな蕾がまばらにくっついていて。

花開くのはまだ先だ。代わりに小さな白い花をいくつもつけた沈丁花の花は、うっとりするような甘い匂いを漂わせえていた。

「……もう、嫌だ」

沈丁花の枝の陰にもぐり込んだ途端、じわりと涙が滲んできた。

「こんなところ……もういやだ」

嗚咽を飲み込むと、抱えた膝に臉を押し当てた。

まだ気分は悪かったけれど、しばらくの間涙を零していたら少し

だけ気分がすっきりしたような気がした。

しばらく……ここで休んでいようかな。

ぼんやりとそんなことを考えていた矢先だった。背後の枝が、がさつと音を立てて揺れた。

途中でお通夜を抜け出してしまったから、連れ戻しに来たのだろうか。

でも、よく考えてみたら、わたしを迎えに来る人なんかいるわけがない。

そうは思いつつ、背後に感じる気配は確かだ。

恐る恐る振り返ると、そこには男の人が、影のようにぼんやりと佇んでいた。

——不味い。

直感が告げる。

「この人は見えてはいけない人だ」と。

二 見えてはいけない人

昔からこういう勘だけはよく働いた。

そして、大抵この勘は外れない。わかつてはいるものの、目が吸い付くように男の人から離れない。

老人のようにも見えるけれど、瘦身ながらにしっかりとした立ち姿は、まだ若いようにも思える。

墨染めの衣は、お坊様のものとよく似ているけれど、布地はすっかり色褪せて裾や袖元はボロボロになっていた。

髪はわたしのよりずっと長い。

背中を覆うほど長い髪。

もちろん手入れなどされていないだろう。

黒い髪はもつれて、絡まった糸玉のようだ。

擦り切れた袖から伸びた細い腕は、蠟のように白い。

ふわりと吹いた風が、男の人の重たげな髪を揺らす。一瞬だけ露になった横顔を目にした。思っていたよりも若い。

青年の視線が何かを捜し求めるかのように、遠くに向けた視線を漂わせ……何気なくこちらを向いて、そして止まった。

青年と視線が重なった途端、ざわりと肌に粟立つような感触を覚えた。

どうしよつ。

額に冷たい汗が一筋流れる。

知らん振りをしていればよかったと、今更ながら後悔する。

しばらくの間、青年との睨めっこが続いた。でも、先に勝負を降りたのは、青年の方だった。急に何かを思い出したかのように辺りをぐるりと見渡した。

「あそこか」

静かな、そして確信に満ちた声。青年は口の端を引き上げた。まるで狙いを定めた獣のようだ。

「……しにびとは、あそこか」

もうわたしの存在など、すっかり忘れてしまったようだ。青年は、お通夜が行われている母屋へと、ゆっくりと歩き出した。

……今のは何？

今更になってがくがくと手が震えてきた。今すぐ逃げ出したいのに、足が思うように動かない。

しにびとのおい。

しにびと？ しにびとって？

耳にまだ残る青年の言葉を頭の中でくり返す。

「あ……」

唐突に理解した。

しにびとは、死に人。

つまり死んだ人のことだ。

この家で死んだのは、恐らくわたしの祖母にあたる人。

あの人は……一体何だろう？

間違いなく、あの人は生きた人間ではないはずだ。けれど、死んだ人間だとも言いがたい。

生きた人間にしてはあまりにも虚ろすぎるが、死んだ人間にしては少々生々しい。

下町に住んでいた頃も、ときどき不思議な人たちを見たことがあるけれど、そういう人たちともまた違うような気がする。

とんでもないところに来ちゃったな……。

気持ちが静まるまでと思っていたら、わたしはいつの間にか眠ってしまったらしい。

寒さに身を震わせて目覚めた頃には、お通夜はとくに終わっていた。

お通夜が終わった日の夜は、今までの腹の探りあいをするような雰囲気とは一変していた。

まるで宴会のような賑やかさで、一瞬戻る家を間違えてしまったのかと、本気で思ったくらいだ。

大人たちはお酒を飲み、次々と出されるご馳走をつまみながら楽しそうに談笑している。

さっきまで大泣きしていた女の人たちも、今は何事も無かったよ

うに、実に美味しそうにお煮しめやお刺身を頬張っているではないか。

まだ小さな親戚の子供達も、大人たちの間を縫うように走り回って、本当にお祭りのようだ。

さっきの白々しいお通夜の空気も苦手だが、大人たちが莫迦みに騒いでいる酒の席も苦手だ。

だからと言って、子供達の輪にも入れるわけもない。

同じ年頃の親戚もいるようだけれども、わたしの素性を知っているのだろう。

遠くからわたしを値踏みするような目を向けて、聞こえているとわかっていて内緒話を始める。

そんな人たちと仲良くだなんて無理に決まっている。
わたしだって、人を莫迦にするような人たちと、と仲良くななんてできそうにないし、したいとも思わない。

結局、この家でわたしはひとり。

他の人たちも、最初のうちはわたしを珍獣のように眺めていたけれど、飽きてしまったのか、すぐに談笑とお料理に夢中になった。

さっさとこの宴会から逃げ出したかった。

……だからと言って、その後どこへ行けばわからない。

ここへ来てまだ間もないせいもあって、わたしは客間で寝泊りしていた。

でも今日はたくさんの親戚がやって来るから、今夜は違う部屋に移ってもらうかもしれないと言われていたからだ。

誰かに聞こうにも、家の人は皆忙しそうで、とても相手になどしてくれなさそうだ。

仕方がない。

宴会の片隅に身を置くと、わたしは雨が叩きつける硝子戸を見つめていた。

昼間はあれほど良いお天気だったのに、日が暮れる頃になると急に雨が降り出してきた。

そのうち止むだろうと思っていたけれど、雨は一向に止む気配はない。

（今夜は寺に運ぶのは難しそうだな）

ふいに誰かが低く囁いた。

（これだけの雨では敵わない）

（とは言え仏さんをここに置いておくのは）

（莫迦らしい、ただの迷信だ）

（いや……だがかし）

代わる代わる大人たちが口にする。一体何の話をしているのだろう。

じっと聞き耳を立ててみると。

「大人たちの話が気になるのか？」

背後からの声に惹かれて振り返ると、若い男の人が背後から覗き込むように立っていた。

三 義兄という人

誰だろう。

昼間、こんな人がいたかどうかも憶えていない。多分、郡司家の人間だと思う。でも。

「わたしなんか構わない方がいいですよ」

気を使っているのか、余所者が珍しいのか。その人が隣に座ろうとしたので、一応忠告しておいた。

けれど男の人は忠告を無視して座り込むと、唐突に訊ねた。

「お前は、由比だろう?」

誰かから聞いたのだろうか。無言のまま頷いた。

「さすが、というべきか」

「……? あの」

こちらが恥ずかしくなるくらい、真っ直ぐにわたしを見つめる。

じろじろ見るのとも違う。親戚の人たちのように、値踏みをするようなのとも違う。男の人はまるで好奇心旺盛な子供のようにわたしを眺めていると、ぼそりと呟いた。

「白鷺と呼ばれた女の娘だけあるな」

白鷺、というのは母のもうひとつの名前だ。吉原で遊女だった母

は、白鷺太夫と呼ばれていたらしい。

なんだ、やっぱり母さんのこと知っていたんだ。またどうでもいいことを言われるのだらうと、覚悟を決めて唇を噛み締めた。

「きれいだな」

予想していたものとは違う言葉が聞えてきた。わたしは思わず聞き返した。

「……何が、ですか？」

男の人は柔らかに目を細める。

「お前が、だ」

低く囁く声に、心臓が大きく音を立てる。

「う、嘘。からかわないでください」

どもりながら反論すると、男の人は小さく声を立てて笑った。

耳が熱い。きつと頬も赤くなっているだろう。

こんな顔を見られるのが恥ずかしくて、わたしは慌てて俯いた。

こんなことを言われたのは初めてだ。ううん……何回か言われたことはある。

『お前はきれいな子だねえ。きつと将来は母さんみたいな売れっ子になれるだらうよ』

べたつくような男の声が蘇り、ぶるりと身震いした。

「あの……ええと」

嫌なことを思い出した。さっさと忘れてしまおうと、全然別のことを考えようと努める。

「あなたは……郡司の血縁の方ですか？」

そこまでわたしの素性を知っているということは、やはり郡司の家の人間だろうと思う。

でも男の人は、ただわたしを静かに見つめているだけで、何も答えてくれようとしらない。

ふと、女中さんたちの話を思い出した。確か郡司の家には、ちょうど二十歳になるひとり息子がいるらしい。

ちょうどこの人も、それくらいの年齢のはずだ。

「あなたはもしかして……正平さん？」

確かそんな名前だ。

でも男の人は何も言っではくれない。わたしが困ったように見つめ返すと、口元にひっそりとした笑みを浮かべる。

「やっぱり。あなたは正平さん……ですよね？」

郡司家のひとり息子は、東京で下宿生活をしながら大学で勉学に励んでいると聞いていた。

「この町は、気に入ったか？」

質問に答えてはくれなかったが、否定もしない。返事を貰うのを諦めて「気に入ったか」の問いに答える。

「……はい。でも」

海と山、ふたつをあわせ持った小さな町は、保養地や別荘地としても名高いらしい。

けれど、この家は小高い山の上にあり、せつかくの海の気配も感じられない。

「でも、ここは少し不便です」

海辺の賑やかな界限に出るのも、狭い山道を下っていかなければならない。大した勾配ではないが、だらだらと続くこの坂道を上り下りするのは、結構面倒くさい。

「そうか」

恐らく正平さんであろう人は、至極真面目にこう答えた。

「だが、慣れてしまえば平気なものだ」

確かに。

住めば都という言葉もあるくらいだから、そういうもののなのかもしれない……などと考えていたら、お腹の虫が急に鳴き出した。慌てて手で押さえるが、鳴ってしまったものはどうにもならない。

もう、恥ずかしい……。

さすがに人前でお腹を鳴らしてしまうなんて、本当に居たたまれない。

「……それにしても止みそうにないな」

「そんなに鳴らしていませんが」

お腹を押さえながら、むきになって反論してしまう。すると正平さんは不可解そうに目を瞬かせるものの、唐突に「ああ」と納得したように頷いた。

自分のお膳をわたしの前に押しやり、最後にお箸を手渡してくれた。

「お前の方のは、これで止むだろう」

お腹の虫が、という意味に違いない。恥ずかしいけれど、またお腹が鳴ったらもっと恥ずかしい。わたしは小さく手を合わせて、さっそく小芋の煮物に箸を付けた。

「さっきの話のこと、聞いてもいいですか？」

ひとつ小鉢を空にすると、お腹の虫もようやく落ち着いてくれた。気を取り直して、白磁の酒器からお酒を注いでいる正平さんに訊ねてみた。すると。

「何がだ」

自分から声を掛けてきたくせに。すっかり忘れているらしい。

「何がって……。大人なたちの話です。それで……」

正平さんの様子を伺う。わたしの問いを待っているかのようだったから、そのまま続けた。

「何を運ぶのですか？」

内緒話のように、そつと訊ねる。

「亡骸だ」

四 鬼の話

「……なきがら？」

「そうだ」

正平さんはゆっくり頷く。

「本当は死んだ日に寺へ連れて行かなければならないのだが、生憎この雨だ。今夜は坊主たちと供に寝ずの番でもするそうだ」

「雨だとか、寝ずの番だとか、ずいぶん大げさですね」

「……知りたいか？」

何を、と聞かなくてもわかった。家人たちの不可解な行動の理由であろう。わたしは深く考えず、ただ好奇心に任せて迷いもなく頷いた。すると正平さんは薄くほほ笑む。わたしが知りたいと答えると確信していたかのように。

「郡司の者は、死んでも茶毘には付さず、土葬もしない。鬼にその身を喰わせるのが慣わしだった」

「鬼、ですか」

突拍子もないことを言い出した。わたしを怖がらせようと企んでいるのだろうか。でも、彼が冗談や戯言を好む性分には見えなかった。

「昔の話だ。寺に運ばれると鬼が手出しができないと知ってから、そうしている」

「……あ」「」

この大雨の中で、棺をお寺まで運ぶなんて無理だ。だが郡司家の祖母の亡骸は、今この家にある。

鬼が喰らうのには、絶好の機会に違いない。正平さんの話を鵜呑みにするなら……の話だけれど。

ことん、と目の前に杯が置かれた。正平さんは手にした酒器を傾け、溢れる寸前まで清水のようなお酒を注いでゆく。

「……これは？」

小さな杯には溢れるほどのお酒で満たされていた。

「酒だ」

それくらい見ればわかる。

「そうではなくて」

まさかこれを飲めと言っのだろうか。

「酒は供養にも清めにもなる。飲め」

素っ気無く告げると、正平さんは自分の杯に口をつける。

「飲めと言われても……」

これまでお酒と呼ばれるものを口に試しがあるのは、酒粕を溶いた甘酒くらいだ。でも、正平さんがまるで水のように飲んでいるのを見ていたら、実はとても美味しいもののように思えてきた。好奇心に打ち勝てず、恐る恐る杯に唇をつける。

「……っ！」

お酒に舌が触れた途端、ひりつとした甘いような苦いような、へんてこな味がした。

「美味しくない……」

思い切り顔をしかめ不満を唱えると、正平さんはかすかに唇をゆるませた。もしかしたら笑ったのかもしれない。

からかわれっぱなしも面白くない。我慢して口の中に残ったお酒を飲み下すと、とにかく何かを言っただけでやらなくては気が済まないと思った。

「子供だと思っただけ、からかわないで下さい」

「からかってなどいない」

平坦な声で正平さんは言うものの、そういうところが、まともに取り合ってくれていないような気がして癪に障る。

「鬼だなんて……いるわけがないじゃないですか」

唐突に、昼間に見た不思議な青年の姿が思い浮かぶ。

まさか。わたしは首を振った。鬼なんて、いるわけがない。

二人の間に沈黙が流れる。騒がしい周囲から、わたしたちだけが取り残されたようだ。

ややあつて、正平さんはぽつんと呟いた。

「信じようが信じまいが、お前次第だ」

突き放すような発言に、わたしはますますむっとなる。

「じゃあ、教えてください。どうして鬼は亡くなった人を食べたりするのですか？」

半ばやけっぱち気味に訊ねてみる。

「鬼だからだろう」

予想通り返ってきた答えは素っ気無い。

「どうして鬼だと人を食べるのですか？」

「お前は『どうして』ばかりだな」

「あ……」

本当だ。さつきから莫迦のひとつ覚えのように「どうして」を繰り返している。

「変わった娘だな」

呆れていると思いきや、正平さんの口調は不思議と穏やかだった。

「……別に。変わってなんかいません」

変わった娘。お前は劣っていると言われるような気がして、好きじゃない言葉だ。

でも……どうしてだろう。正平さんに言われても、あまり嫌な感じがしない。

「変わっていますか、わたし」

「鬼の所業に疑問を抱く者など、そうはいない」

「でも、そんなことをするには理由があるから、と思うのはおかしいでしょうか？ 鬼だって、最初から鬼だったわけではないだろうし」

酒器に手を伸ばそうとした正平さんの動きが止まった。

またおかしいことを言ってしまったらしい。正平さんの視線を痛いくらい額に感じながら、もう何も言つまいと堅く唇を引き結ぶ。

「ふ……」

小さく息を吐き出した正平さんは、額を片手で押さえると、俯いたまま小刻みに肩を震わせた。

どうしたのだろう。笑っているようにも思えた。でも、もしかして泣いているのかもしれない。不安になって見守っていると、正平さんはようやく顔を上げた。

「やはり、お前は変わった娘だ」

どうやら笑っていたようだ。少しだけ安心する。

「恐らく罰だ」

「正平さん？」

正平さんは手にしていた杯のお酒を、一気に飲み干した。

「罰を受けるべき者が、当然の報いを受けただけの話だ」

正平さんの話は曖昧で、よくわからなかった。ただ、正平さんは鬼の存在を信じているのだということだけは、何だかとても伝わってきた。

わたしはどう受け止めるべきだろうと頭を悩ませていると、正平さんは手を伸ばし、わたしの頭をくしゃくしゃとかき回した。

「真面目に取らなくていい。戯言だ」

とても戯言を言うようには見えない面持ちで呟くと、乱れたわたしの髪を指先ですくい上げた。

かすかに頬に触れた指先は、ひどく冷たかった。

五月下の人影

その夜、布団にもぐりこんで目を閉じても、なかなか眠れそうになかった。

暗い天井を睨みながら、正平さんに聞いた話を何度も頭の中でくり返していた。

そして、同時に思い出すのは、昼間に見たあの人——墨染めの衣姿の青年だった。

……しにびとは、あそこか……。

耳元で囁いた低い声には、どこか嬉々とした響きが含まれていた。

（鬼にその身を喰わせるのが慣わしだった）

正平さんの声が脳裏に甦る。

……やっぱりダメだ。

もう考えるのはやめようと思ったけれど、鬼の話がずっと気になつて仕方がない。

わたしは、夜具を跳ね除けると、のそりと起き上がった。

いつの間に雨の音も聞こえない。どうやら雨が止んで月が出たようだ。そつと障子を開いて硝子窓に顔を寄せると、外の様子を確認する。

いつの間にか、月を隠していた雲も空の彼方へ追いやられていた。これなら灯りも必要ないだろう。

音を立てないように襖を開くと、抜き足差し足で暗い廊下を進む。階段を降り廊下を進み、厨にある勝手口から外へと抜け出した。

母屋から祖母の亡骸がある離れへ行くには、いったん外へ出なければならぬ。

古びた下駄を爪先に引つ掛けると、ぬかるんだ地面をそつと歩き出した。

少し湿った風が吹いた。かすかに潮の匂いがする。海辺に出るには遠いのに、少し不思議な感じがした。

何気なく空を仰ぐと、薄雲がゆっくりと流れる。途端、真珠色に輝く月が顔を出した。

「きれい……」

嫌なことなど何もかも忘れてしまいそうな美しい月だった。悔しいけれど、今まで見た中で一番綺麗に見える。月から視線を引き剥がした。その時だった。

びちゃり。

背後で、ぬかるんだ地面が音を立てた。反射的に身体が動いた。すばやく物陰を探し、近くにあった大きな庭石の影に身を潜める。

びちゃり、びちゃり……………。

息をするのも忘れ、わたしは音に聞き耳を立てた。

びちゃり、びちゃり、びちゃり、……………。

どんどん足音が近付いてくる。

逃げなくては。でも、恐ろしくて足が動かない。

びちゃり。

足音が目の前で止まった。息をするのすら苦しい。庭石にすがりついた手が震えているのがわかる。油断をすると、声を上げてしまいそうになる。わたしは足音の主の姿を確かめることもできず、ただ肩を震わせていた。

びちゃり、びちゃり、びちゃり……………。

どんどん足音が遠ざかってゆく。

…………… 一体、どこへ行くのだろうか？

躊躇ったのは一瞬。わたしは、恐る恐る庭石から額を離すと、足音の主の姿を探した。

…………… いた。

月明かりに浮かび上がる姿に、思わず息を飲んだ。

やっぱりそうだ、あの人だ。

背中を覆う、もつれた黒髪。闇と同じ色をした墨染めの衣から伸びた細く青白い腕。

気が付いたら、青年を追って歩き出していた。

もうやめた方がいい。ついて行くな。心の中の誰かが忠告する。けれど足が止まらなかった。

歩いて、歩いて、歩いて……青年は離れにたどり着くと、土足のまま縁側に上がり、するりと中へと上がり込んでしまった。

あまりにも堂々と忍び込んでいく姿に、呆然としてしまう。だけど離れには、寝ずの番をする大人たちがいるはずだ。こんな真夜中に見知らぬ人間が入ってきたら、黙っているわけがない。

しばらく耳を澄まして中の様子を伺っていたが、いくら待っても大人たちの声は聞こえてこない。胸がざわざわする。もう母屋へ戻った方がいい。

だけど……。

意を決すると、わたしは雨戸の隙間からこぼれる光に向かって歩き出した。

六 人を喰らう鬼

息をするのも苦しいほど、緊張していた。

ざわざわとした感覚がどんどん強くなってくる。

雨戸は人ひとり通れるくらい開かれている上に、廊下には泥で描かれた足跡が残されていた。

下駄を脱ぐと、四つんばいになって戸の隙間に身を滑り込ませる。

まず廊下があり、障子を隔てて祖母が眠る部屋がある。

中の灯りが透けて、障子がぼんやりと明るい。足跡は廊下を横切って、同じようにわずかに開いたままの障子の向こうへ続いていた。

どうして、こんなにも静かなのだろうか？

大人たちがいるのに。

侵入者がいるのに。

気づいていたら……黙っているはずがないのに。

嫌な予感がした。

どうしようと思っていると、黒い影が障子の奥で揺らめいたのを目にした。

迷ったものの、そのまま這って進むことにした。そして、そおつと障子の隙間から部屋の中を覗き込む。

まず最初に目に入ったのは、壁にもたれ掛かって眠るお坊様の姿だった。

隣りにいるよく知らない親戚らしき男の人も、うなだれるようにして眠っている。

ぽつ。

大人たちが眠るそばに、黒い染みができた。

ぽつ、ぽつ、ぽつ。

黒い飛沫が畳の上にどんどん染みをつくっていく。
死角になっている方向から飛んでくるようだ。
かすかに犬猫が水を飲むような音が聞こえる。

なんだろう……？

もつとよく見ようと身を乗り出した。

蝋燭の薄明かりに浮び上がった黒い背中が、最初に目に飛び込んできた。

背中を覆う、もつれた黒髪。あの青年だとすぐにわかった。

ぴちゃぴちゃと舐め、すする音。

合間に挟まる硬い何かを砕く鈍い音。

一心不乱に何かに食らいつく姿は、まるでお腹を空かした犬に似ていた。

わたしは目の前の光景に釘付けになっていた。
目をそらしたくても、そらすことができない。

悲鳴を上げようにも、声は喉の奥でかき消えた。

金臭い匂いが鼻を突く。

青年がむさぼっているものが何なのか。わたしはようやく気がついた。

「……………」

吐き気が襲ってきて、慌てて口を押さえた。

青年は食むことに夢中で、わたしに気づかないようだ。

もしかしたら気づいていても、気にしていないだけなのかもしれない。

青年は真つ赤な血に染まった肉塊に顔を埋めると、大きく首をのけぞらせて力まかせに肉を引き裂いた。

肉と一緒に食いちぎった布切れを邪魔そうに吐き捨てる。

べちゃり。

音を立てて、何かが手元に飛んできた。

布地は黒ずんだ血を十分に吸って、元の布の色もがわからないほどだった。

これは、何？

信じたくなかった。

この布切れが祖母が身につけていた経帷子だなんて。

白かった布を違う色に染め変えてしまったものは、祖母の流した

血などとは。

……………鬼だ。

人喰いの鬼が、ここにいる。

「いやああっ！！」

わたしは初めて悲鳴を上げた。

悲鳴を聞いて、青年はやっと動きを止めた。

ゆっくりと振り返ると、無造作に血で汚れた口を拭う。

「おまえは」

やはり、あの青年だった。

むき出しになった青年の顔は驚くほど幼く無防備で、ひどく驚いているようだった。

わたしの視線は、青年の傍らに横たわった血まみれのモノに向いていた。

血だらけの肉の塊は元の形など、とうに失っていた。乱れた布団は、どす黒い色に染まっている。

「う……………」

喉の奥から酸っぱいものがせり上がってきた。

両手で口を押さえた途端、吐瀉物が溢れ出た。

ろくにものを食べていなかったから、水っぱいものばかりしか出

てこなくて余計苦しかった。

「あ、あ」

足から力が抜けて逃げることもできない。

このままでは、わたしも祖母のようにこの身を喰い千切られるの
だろう。

絶望のあまりどうすればいいのわからなかった。

「……みるな」

青年は振り絞るように告げる。

「ここから去れ」

恐ろしげに告げると、側にあつた蠟燭の炎を素手で握りつぶした。
途端、辺りはたちまち突然闇に包まれる。

しかし、わたしの意識もそれきり途切れてしまい、目を覚ました
時には、すでに祖母の葬儀は終わっていた。

七 悪夢の後

あれから丸一日、わたしは眠ってしまっていたようだ。

そのせいで親族一同の印象を悪くしてしまっただかもしれないと気をもんだが、よくよく考えてみれば、妾の子など最初からよく思われていないに決まっている。

だから別に気にする必要もない。開き直ってしまえ。そう思っていたのに、誰かの話し声が聞こえるだけで、もしかしたらわたしの陰口を叩いているのではなからうか、みつともないと笑われているのではないかと気に病んでしまう。

気になって仕方がない。でも、気にしても仕方がない。さっきから堂々巡りだ。

「僕は明日の汽車で東京に戻るよ」

昼食を取った後、正平さんは東京へ戻ると言い出した。

朗らかな笑顔でお茶のおかわりを催促する正平さんは、昨夜とはまるで別人のようだった。

正平さんって……どんな顔をしていたっけ？

あの時の正平さんは、どこか物憂げで、掴みどころのない霞のような印象だった気がする。でも、食後だというのに大きなお饅頭を美味しそうに頬張る正平さんは、まるで別人のような気がした。

「ああ、君もいる？」

残りのお饅頭を差し出された。わたしは首を振って辞退する。

「母上もおひとついかがですか？」

「お饅頭は結構です。そんなことより……明日には帰るだなんて、もう少しゆつくりしていきなさい」

お饅頭をぴしゃりと跳ね除け、渋い顔をしたのは郡司家の奥様である彰子さんだった。

彰子さんは、正平さんみたいな大きな息子がいるとは思えないほど、若々しくてきれいな人だ。

こんなきれいな奥様がいるのに、どうして父は遊郭通いなどしたのだろう。

父という人の顔を思い出そうとするが、どんな顔だったかよく思い出せない。

葬儀が終わると、仕事の取引だからと早々に出掛けてしまったらしい。

どうやら普段から留守がちな人のようだ。けれど、それは単に仕事に忙しいだけではないらしいと、女中の人たちが話しているのを聞いてしまった。聞けばわたしみたいな子は、他にもいるらしい。

こんなに立派な家と、よく出来た奥様と、東京の大学へ行けるような優秀な息子がいるというのに、何が足りないというのだろうか。男の人ってよくわからない。

「悪いね母上。今月中に論文を提出しないと、教授に大目玉を食らってしまうからさ」

からからと笑っている正平さん。やっぱり、お通夜の晩とはまるで別人のようだ。

もしかして……わたしはまた、見てはいけない人を相手にしてしまったのかもしれない。

この家は、そんな得体の知れない者に好かれているらしい。改めてこの家に来てしまったことを後悔する。

「そうだ由比。荷物持ちを手伝ってくれたら、お礼にソーダ水でもご馳走してあげよう」

傍観者として二人のやり取りを眺めていたから、まさか話を振られるとは思わなかった。

「え、あ……はい」

突然でどう対処すればいいのかわからない。ただ口をぱくぱくしてしまふ。

「荷物持ちなんて、桂三さんをお願いすればいいでしょう」

穏やかな声とは裏腹に、彰子さんがわたしを見る目は冷ややかだ。彼女の目に、わたしがどう映っているのかわかったような気がした。

「いえ……わたしは、遠慮します」

「僕はね、可愛い妹に見送って欲しいんだ」

それなのに、正平さんは彰子さんの神経を逆撫するような発言

をするのだから、たまったものじゃない。

「いい年をして我侭はお止めなさい。由比さんは具合が悪いのだから。明日は桂三さんとわたしがお見送りに行きます」

「わかりましたよ、母上。由比、残念だけど、ソーダ水はまた今度ね」

叱られた子供のように肩をすくめながら、悪戯小僧のような笑みをこちらに向ける。

へらへらと笑う正平さん。恐らく、この人が正真正銘の正平さんなのだろう。

じゃあ、あの晩言葉を交わした相手は……深く考えないことにする。たった今、そう決めた。

「はい。また今度、楽しみにしています」

少し混乱しながら曖昧な笑顔で答えると、途端に彰子さんの厳しい視線が飛んできた。

ああ、もう面倒くさい。

わたしが正平さんにヘンな気を持つと思っているのだろうか。

何て本当に面倒くさい。今、わたしの頭の中は、お通夜の晩に見た出来事でいっぱいだというのに。

一心不乱に肉塊を貪る青年の姿。

辺りには赤黒い血と肉片が飛び散り、金臭い血の匂いを一面に振り撒いていた。

鼻腔の奥に、まだ血の匂いがこびりついているような気がした。

思い出しただけで、喉の奥から酸っぱいものが競り上がってくる。

やめた。このことも、考えるのはやめよう。

あの夜見た出来事は悪い夢のようで、まだ誰にも話していない。
あれは夢だったのか、はたまた現なのか。自分でもよくわからなくなっていた。

八 海辺での再会

散歩をしたいと告げると、彰子さんは快く送り出してくれた。

正平さんが同行を名乗り出たが、やんわりと断った。これ以上、居づらくされるのはご免だからだ。

せっかくだから海岸に出てみようと思い、わたしは海岸へと歩き出した。

くねくねとした坂道をたどり、何度か切り立った岩に挟まれた暗い道を通り過ぎる。

この辺りは保養地や別荘地としても知られている。

ぽつりぽつりと西洋風の洒落た建物があると思えば、鬱蒼とした木々に囲まれた寺社もあり、なかなか興味深い土地のようだ。

寄り道をしながら歩いたせいもあり、やっと海辺にたどり着いた頃には、お天道様も傾き始めていた。

「わあ……」

なんて広いのだろう。

汽車の中からも海を見た時も驚いたが、こうして目の当たりにするのとはまるで違う。

空も海も、茜色に染まっていた。

波打つ水面はきらきらと金色に輝いている。

波が打ち寄せるたび、水面は黄金の粒のように碎けては散ってゆく。

「きれい……」

思わず呟いた声も、波の音にかき消されてしまう。時間が経つのを忘れてしまいそう。絶えず押し寄せる波は、いくら眺めていても飽きることなどなかった。

しばらくぼんやりと過ごしていたが、気がつけば辺りは足元も見えなくなるくらい暗くなっていた。

そろそろ帰らなければ。

満潮なのだろう。爪先を打ち寄せる波が濡らしている。打ち寄せるたびに、どんどん波が迫ってきているような気がする。

帰ろう。

踵を返して砂浜を踏んだ時、誰かが泣いているような……そんな気がした。

つい足を止め、辺りをぐるりと見渡した。

「あ……」

岩場の向こう、暗い海の中に人の姿を見つけた。

暖かくなってきたとは言え、まだ春の海は冷たい。しかも潮が満ちてきた夜の海に入るなんて、正気の沙汰ではない。細い身体は今にも波に飲まれそうになりながら、それでも沖に向かって歩いていく。

「まさか……」

しばらく様子を眺めていると、押し寄せる波に足元を取られ、あつと言う間に波の中へと飲み込まれてしまう。

「……っ！」

大変だ。

考えるよりも早く草履を脱ぎ捨て、海岸を走っていた。

「……ねえ！」

だからと言ってどう声を掛ければいいのかわからず、何でもいいから呼び掛けてみる。けれど波の音にかき消されて、わたしの声は届かない。

どうしよう。

焦燥感に駆られながら海を見渡すと、波の合間からぬつと黒い頭が浮上してきた。

さっきの人だ。慌てて駆け寄ろうと波打ち際に踏み込んだ時だった。

これまでになく大きな波が、わたしに向かって襲い掛かってきた。

「きゃあっ！」

濡れた砂浜に足を取られ、しりもちをついたところで波が押し寄せ、頭から波を被ってしまう。もう全身ずぶ濡れだ。

ざあつ、と音を立てながら、手のひらの下にある砂が、波に合わせて沖の方へと流れてゆく。

あの人は？

顔に貼り付いた髪を払い除けながら、黒い海を見渡した。

駄目だ――いない。

焦りが走る。

沈み込む砂に足を取られそうだ。よろけながらも立ち上がると、再び大きな波が襲ってきた。

思ったよりも波は大きくなかったが、潮が引いていく勢いに足を取られそうになる。

またしりもちをつきそうになる瞬間、冷たい手がわたしの腕を掴むと力強く引き上げた。

ほっとしたのも束の間、お礼を述べようとして相手の姿を目の当たりにして凍りついた。

わずかに残る夕陽の下、長い髪から海水を滴らせた青年が、驚いたように瞠目していた。

多分、彼がそんな顔をしていなかったら、悲鳴を上げて逃げ出していたかもしれない。

裏庭で会った青年……祖母を食らった鬼だ。
それが今、目の前にいる。

まだ悪い夢の続きを見ているのだろうか。
お通夜の晩に見たものが、あまりに現実味を帯びていなかったか

らかもしれない。

恐ろしいと思いつつも、どこか絵空事のように思っていたのふしもあるのだろう。

それに……。

幻のような存在だと思っていたのに、わたしの腕はしっかりと青年の手の中に納まっている。

冷たい肌、水も滴る、もつれた長い髪、じつとりと濡れた衣――間違いなくすべて現実のものだ。

怖いはずなのに目が離せないのは、わたしにもよくわからない。

「あの……大丈夫ですか？」

何となくこの人が泣いていたような気がしたから、つい聞いてしまった。

すると青年は、わたしの手を憎々しげに振り払った。

「去れ」

青年は平坦な囁きを落とすと、くるりと背を向けた。

ゆつくりと砂を踏みしめるように歩き出すその姿が見えなくなるまで、ぼんやりと眺めていた。

濡れそぼった身体に、冷たい海風が吹き付ける。

もう夕陽はすっかり沈み、代わりに青白い月が、静かに辺りを照らしていた。

九 陳腐なお願い

案の定と言うべきか、翌日わたしは風邪を引いてしまった。

自業自得だ。暖かくなつたとはいえ、海に入るなんて時期としては早過ぎた。

かつては祖母の住まいだった離れの寝室で、ひとり静かに布団に包まって天井を眺めていた。

ふと目を覚ますと、額に乗せていた氷嚢がないことに気が付いた。枕元に転がっていた氷嚢は、すっかりぬるくなってしまうていた。

熱い。なのに、身体はぞくぞくと悪寒が走る。

冷たい水が欲しかった。

枕元にちゃんと水差しが用意されていて、飲みたい時に勝手に注いで飲めるように用意されている。

わたしは重い身体を起こすと、水差しに手を伸ばした。

ガラス製の水差しはひどく重たく感じる。

持ち上げて水を湯呑みに注ごうとしたけれど、水差しを取り落としてしまう。

幸い割れはしなかったものの、水差しの水は全部零れてしまった。水は畳の上に広がり、あっという間に吸い込まれてしまった。

水が欲しい。

けれど熱で干からびた喉からは、擦れた声しか出ない。

起き上がって、誰かに頼もうかとも思った。
でもそれもひどく億劫で、水を飲むくらいだったら横になってい
る方が楽だった。

また彰子さんに怒られる。頭の片隅で考えながら、わたしは布団
に潜り込んだ。

「熱い……」

風邪くらいで死にはしない。薬を飲んで眠れば何日かで直ってし
まう。

比較的体が丈夫な方だし、これくらいどうってことはない……
はずだ。

でもさすがのわたしも身体も心も弱ってしまっていたのだろう。
今まで付きっ切りで看病などされた経験はないけれど、呼べば必
ず声が届く場所に誰かがいた。

それが祖母だったり、近所の叔母さんだったり。人の気配を周囲
に感じないような環境に置かれるのは初めてだった。

寂しい？ それとも心細いのだろうか？

冷静に考えながら、自然と溢れてくる涙の意味を考えていた。

考えているうちに、どうやらうつらうつらしていたようだ。額に
触れた冷たい感触に、はっと目を覚ました。

瞼を開いた途端、額に乗せられたものが、びくりと跳ね上がった。
それが冷たい手の感触だったのだと、一拍遅れて気が付いた。

せつかく冷たくて気持ちがいいのに。
わたしは離れた手の感触を名残惜しく思いながら、ぼんやりと瞼を開く。

ふいに視線を感じて、枕元に目を向けた。
熱で潤んだ目には、大きな黒い塊のように見えた。背中を丸め、じっとわたしを見つめているようだ。

「……………誰？」

何度か瞬きをして目を凝らす。
感情というものを忘れ去った暗い双眸が、静かにわたしを見下ろしていた。

床に引きずるほど長い髪。
色褪せた墨染めの衣。

鬼と呼ばれる青年が、どうして枕元にいるのだろう。

「わたしを……食べに来たの？」

風邪など引いていなかったら、一目散に逃げ出していたかもしれない。

枕元の水差しを振り回していたかもしれない。
けれど今は何をするのもけだるい。熱のせいで何もかもが夢の中の出来事のように感じていた。

「お祖母さまみたいに……わたしを食べるの？」

返事など期待していなかった。やっぱりどこか、これは夢だと思

っていたのだろう。

「いいや」

青年が返事をしたものだから、本当に驚いた。

「生きた人間は喰わない」

抑揚のない低い声。言葉の意味がぼんやりした頭に沁み込んでくるまで、少し時間が掛かった。

生きた人間は喰わない。

「じゃあ、どうしてここにいるの？」

もしかしたら、こうして横になっていたわたしを、死んでいると思ったのだろうか。

「わたしが、死んでいると思ったから？」

青年は何の反応も示さない。あえて否定しないところを見ると、どうやら当たっているらしい。

「やだ」

ただの風邪なのに。

思わず笑いが込み上げる。

「あはは」

わたしは上掛けに顔を押し付けると、声を殺して笑ってしまった。

「ふふふ、は、あはは」

心なしか、青年は決まり悪そうだ。笑い出したわたしから、ふいと目を逸らした。

そうだ。いいことを思い付いた。

これが「いいこと」なのかわからないけれど、少なくともわたしにとっては、退屈しなくていいことのように思えた。

「死んだ人を食べなきゃいけないのでしょうか？」

青年は沈黙を守ったまま、身動きひとつ取ろうとしない。

「わたしが死んだら、食べてもいいっていったら嬉しい？」

「……何を莫迦なことを」

今度は反応があった。わたしは思わずにやりと笑った。

「あなたがお祖母さまを食べちゃったから、皆警戒していると思う。しばらくは食べるのはきつと無理。でも、あなたはそうだと困るのでしょうか？」

青年は答えない。やっぱり図星だと、つい嬉しくなってしまう。

「わたしね。ずっとこの家にいると思う。しわくちやのお婆ちゃんになって、きつと死ぬまでね」

この家の人たちが追い出さない限りね。と、心の中だけで付け加

える。

「…………なぜ？」

擦れた声がわたしに訊ねる。

「なぜって……だって」

どうしてわかり切ったことを聞くのだろう。

「だって、妾の娘なんて嫁の貰い手がつくわけないでしょう」

自分で言っていて嫌になる。でも本当だから仕方がない。

「歳を取ったら、ものすごい偏屈なお婆ちゃんになるつもり。そうすれば、好き好んでわたしに会いになんてこないでしょ。だからわたしが死んでも、二、三日は誰も気がつかないと思うの。そうすれば誰かが気がつく前に、わたしを食べる時間は十分あるというわけ。どう？ いい考えでしょう」

だけど青年はうんともすんとも言おうとしない。

今思いついた考えの割には、なかなかいい手だと我ながら思う。残念ながら、この人はそうは思ってくれなかったみたいだけど。

「でも、ひとつだけ条件があるの」

青年が誘いに乗ってくれば退屈はしないし、誘いに乗らなければそれはそれで仕方がない。

「あなたのために嫌われ者になったら、わたし、誰も話し相手がい

なくなってしまうでしょう。そんなにお喋りな方じゃないつもりだけど……たまには誰かと話がしたいって思うような気がするの。だから……」

大した話じゃないのに、だんだん気恥ずかしくなってきた。青年から目をつい逸らしてしまう。

「話し相手になって欲しいの」

口に出すと恐ろしく陳腐な発言だと気がついた。言った直後に後悔する。

「……なんて、ね」

笑って誤魔化そうと思ったけれど、どうしてか上手く笑えない。青年の反応がまったくくないのも手伝って、恥ずかしさは頂点に達する。

「……いい、やっぱり忘れて」

穴があつたら入りたい。でも穴なんてないから、代わりに布団の中に逃げ込んだ。

今の言葉を、取り消してしまえばいいのに。

ぎゅっと目を閉じる。

青年が早く消えてしまえばいいのにと願っているうちに、いつの間にか眠っていた。

十 ずるい約束

翌日、風邪はあまりにもあっけなく治ってしまった。

熱もすっかり下がったようだ。おまけに食欲も沸いてきた。女中の妙さんが持ってきてくれたおかゆも、全部平らげてしまいそうなくらい空腹だった。

「もう大丈夫そうですね。よかったよかった」

空になったお碗を見て、妙さんは満足そうに頷いた。

「じゃあ、後で果物でもむいてあげましょうね。美味しい桃をいただいたのですよ」

「わあ、桃なんて久しぶり」

嬉しそうにはしゃぐと、妙さんも嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「ちょっと待っていてくださいね。今すぐ持ってきますから」

妙さんが離れから立ち去るのを待つて、わたしは寢床に横たわったまま、部屋の片隅にうずくまる黒い影に声を掛けた。

「ねえ、桃は好き？」

青年はけだるげに顔を上げると、小さく頷いた。

「妙さんが持ってきてくれるから、一緒に食べよう」

目を覚ますと、青年はまだこの部屋にいた。どうやら青年は、わたしの莫迦みたいな誘いに乗ってくれたようだ。

ということは、わたしも青年との約束を守らなければならないというわけだ。

だけど、わたしが死ぬのは当分先だ。熱を出しても翌日にはケロリとしているような娘だ。そう簡単に死ねやしない。半分騙したようなものだけれども、けして嘘ではない。

残念ながら、話し相手というような楽しい関係には到底なりそうになかった。青年はまるで野良猫のようで、気まぐれにしか姿を現してくれない。

そばにいたとしても、特に話をするわけでもない。ただ部屋の片隅に、ぼんやりと座っているだけだ。

話し掛けても何も返事はくれないけれど、仕方なく独り言のような話をし始めると、一応耳を傾けてくれているようだ。もしかしたら、話をするのが苦手な人なのかもしれない。

だけど、こうして目を覚ました時、誰かが側にいてくれるというのは嬉しかった。この人は死んだ人間を食べただけなのだと、わかってはいるけれど。

いくら好意的に物事を捕らえようとしても、所詮相手は化物だ。

郡司の家の人間が死ぬのを待っているだけだと改めて知るのは、やっぱり悲しい。

「お前の命は、いつに尽きる？」

十日に一度くらい、青年はこう訊ねてくる。

耳朶に響く静かな声は、残酷な問いをくり返す。

そうだ。

隣にいるのは、死人喰いの鬼。

そばにいてくれる代わりに、死んだらこの身体を捧げることになっている。

祖母のお通夜の晩に嗅いだ血の匂いを思い出したかった。あの時感じた恐ろしさをもう一度思い出せば、この人に対して淡い期待なんて抱いたりしないから。

なのに、どうしても思い出せない。

だからその質問がされる度に、わたしは静かに息を吸い込んで、につこりと笑ってこう答えることにしている。

「秘密」

癢に障るから教えてなんてあげないわけじゃない。

いつ死ぬかなんてわかるわけがないからだ。

もし五十年後なんて答えたりしたら、我慢ができなくてどこかへ行ってしまふ可能性だってある。

そんなやり取りを何度かくり返しているうちに、春は過ぎ、いつの間にか夏を迎えた。

十一 訪問者

お盆に入ると、東京にいる正平さんの帰郷にあわせて、父も戻ってくるようになった。

実を言うと、母屋に入るのは久しぶりだった。わたしの生活は離れで、彰子さんと寝食を共にする機会などなかった。母屋は余所の家の匂いがした。

普段使わない高価そうな洋風の食器を下ろしたと妙さんは言っていたけれど、普段を知らないから良いとも悪いとも言えなかった。

その上、普段飲まない珈琲が目の前に置かれた。外国人からわざわざ豆を取り寄せた一級品らしい。

ただわたしには一級品のありがたがいまいちわからない。口を付けると、ひどく苦くて飲めたものではなかったからだ。

「ここでの暮らしはどうだ？」

珈琲と苦戦しているさ中、着流し姿でくつろいだ父がわたしに言った。

最初、自分に話し掛けたとは気づかなかった。彰子さんに目配せられて、わたしは慌てて口の中の珈琲を飲み込んだ。

「はい、皆さんにとてもよくしていただいて……」

この人が父親だったのだと、正平さんが「父さん」と言ったのを

聞いて気が付いたくらいだ。同時に、顔を忘れてしまっくらい会っていなかったのだとも自覚する。

どうしてこの人は、今更わたしを引き取ろうと思ったのだろう。今なら聞いても大丈夫そうな気がした。

「あの……」

思い切って話を切り出そうとした途端、彰子さんが遮るように話を始めた。

「この間千歳叔母様が、正平さんに良いお話を持ってきてくださったのよ」

わたしに話をさせまいとしているのか、普段口数の少ないはずの彰子さんは、次々と言葉を並べる。

「お写真を拝見したら、とても優しそうなお嬢さんなのよ。この春女学校を出て、今は花嫁修業にいそんでいるそうよ。ねえ正平さん、一度くらいお会いしてみたらどうかしら？」

「いやあ……」

正平さんはあからさまに困った顔になる。

「僕にはまだ大学での勉強が残っているので、お会いして、もし……という事態になっても、すぐには……あれでして」
「そんな取り越し苦労ばかりしていたら、何にも始まりやしませんって。ねえ、あなたからも正平さんに何かおっしゃってはもらえませんか？」

どうやら正平さんのお見合い話があるらしい。わたしを取り残して、三人の間で話が進められていく。

そうか。やっぱりわたしは彰子さんによく思われていないのか。

当たり前といえば、当たり前だ。仕方なく開き直ると、三人の茶番劇を眺める。

寡黙な父親と、良妻賢母の母。社交的で陽気な息子。そこにわたしという存在はいらない。

早く離れに帰りたい。

そうしているうちに、お見合いの話題は終わったようだ。お盆休み中に一度会うということで、話がまとまったようだ。

「そうだ、母さん。明日友達が来るんだけどさ。客間をひとつ用意してもらえる？」

「まさか、正平さん……」

いつも表情を変えない彰子さんの顔に、期待交じりの笑顔が宿る。

「ああ違う違う」

正平さんは慌てて否定する。

「大学の友人だよ。ほら、以前にも来たことがあるだろう。葛木だつて」

「……あら、そうなの」

すると彰子さんの顔は、見る間にがっかりとしたものになる。わたしは彰子さんの百面相が珍しくて、つい二人のやり取りを眺めてしまう。

「由比さん」

わたしの視線に気づいたようだ。彰子さんは冷淡にわたしを見下ろした。

「あなたは離れにお戻りなさい」

「はい」

つい正平さんが持ち込んだ和やかな空気に、自分の立場を忘れてしまっていた。わたしは一礼すると踵を返した。

「由比、また後で」

背後から正平さんの声が追い掛けてくる。

また後で、か。

今度母屋に出向くのは、正平さんが東京へ戻る時だろう。

いったん足を止めて軽く頭を下げると、わたしは逃げるように離れに戻った。

夕餉に母屋へ呼ばれることもなかった。いつものようにひとりで

済まし、湯浴みをした後はもう寝るだけだった。

今日も暑い夜だった。灯りを落として、虫取りの線香を焚くと、庭に面した窓を開け放ち、縁側に腰を降ろした。

お客さんはもう来たのだろうか。

母屋の方へ耳を傾けてみるものの、聞こえるのは涼しげな虫の声ばかり。人の声はちつとも聞こえやしない。

その時だった。

離れの近くにある裏口から声がした。

「申し訳ありません。こちらは郡司さんのお宅でしょうか？」

「そうですが……」

誰だろう。

でもここにいるのはわたししかない。とはいえども、こんな夜更けに、簡単に人を招き入れるのは考え物だ。

「申し訳ないのですが、ここは裏口なので、正面に回ってもらえませんか？」

声を張り上げると、男の人は申し訳なさそうな様子で言った。

「非常に申し上げにくいのですが、正面がわからなくて」

どうやらかなりの方向音痴らしい。

仕方がない。慌てて蠟燭を探すと、手近にあるお皿に立てて灯りをこしらえた。適当な下駄を引つ掛け、裏口の外に立っている人の姿を引き戸の格子越しに覗き込んだ。

おぼろげな蠟燭の灯りに浮かび上がったのは、洋装に身を包んだ若い男の人だった。

「ああ、よかった。あ、と……」

自分がおかしなところから入ってきてしまったと自覚したらしい。男の人は申し訳なさそうに頭を掻いた。

「申し送れました、私は正平くんと同じ下宿の葛木壺夜と申します」
「正平さんの、お友達ですか？」
「ええそうです」

葛木壺夜と名乗った男の人の声は、ほんの少しだけあの青年の声に似ている。そんな気がした。

十二 兄の友人

突然の訪問者を正平さんの元へ案内すると、静かだった母屋は急に活気づいた。

食事はもう取ったか、風呂に先に入るか、取り敢えずお茶の一杯でもどうだ……と、正平さんは矢継ぎ早に質問を浴びせ、葛木さんは困ったように笑っていた。

用事を終えたわたしは、庭を通って離れへと戻る。

誰もいない、虫の音だけが静かに響く、わたしの住まい。知らず知らずのうちに、わたしはあの人の姿を探していた。暗がりにはひっそりと佇む、墨染の衣を纏った鬼の青年の姿を。

でも、あの人の姿はどこにもない。

「ねえ、いないの？」

暗闇に向かって呼び掛ける。

葛木さんの声が、あの人に似ているからかもしれない。無性に今、会いたかった。

「ねえ……………」

話し相手になってくれるんじゃないの？

呼ぶ名前すら知らない人に、今ここにいない人に、わたしはそつと呟いた。

「なによ……嘘つき」

「昨夜は申し訳ありませんでした」

翌朝、正平さんは友人である葛木さんを連れて、わたしの住まう離れに訪れた。

葛木さんは文学青年風の、繊細そうな男の人だった。昨日は暗がりによくわからなかったので、今初めて会ったようなものだ。

昨夜は洋装姿だったけれど、今朝は正平さんと同じ袴姿と、くつろいだ格好をしていた。

「以前に一度来たから大丈夫だと思っていたのですが……でも、夜道のせいで道がよくわからなくなってしまいました」

葛木さんが苦笑交じりに言い訳を口にすると、正平さんがすかさず突っ込んだ。

「夜道のせいじゃなくて、お前のもの憶えが悪いだけだろうが。もうろくするにはまだ早いぞ葛木」

「確かにまあそうかもしれないけれど、もうろくとまではひどいなあ」

目を閉じると、あの人……死人喰いの青年が話をしているような錯覚を覚える。

春から一緒に過ごしているものの、ろくに会話など交わしたためしがない。

無いものねだりだと言えはそれまでだけど、こんな風にあの人が話をしてくれたらいいのに、と思ってしまう。

「由比、お前今いくつだっけ？」

唐突に、正平さんが訊ねる。

「ええと、十五になりました」

「へえ、十五だったのか」

身体が小さいので、もう少し年下に思われていたのだろう。

「正平、お前だって人のことは言えないだろう。自分の妹の歳も忘れるような奴に、もうろくしただなんて言われたくないなあ」

葛木さんは、さっきのお返しと言わんばかりに、強気に言い返してきた。

「うるさい。俺だってまだ数えるほどしか会っていないのだから。歳だって今初めて聞いたんだぞ、知らなくて当たり前じゃないか」
「まだ数回しか？」

葛木さんは、不思議そうに首を傾げた。

そうか。葛木さんはわたしの素性を知らないんだ。

どう説明したらいいだろうと考えていると、正平さんが簡潔に説明をしてくれた。

「ああ、母親が違うんだ。この娘を養っていた婆さまが亡くなったから、うちに来たんだよ。だから、僕たちは出来立てはやほやの兄

妹ってわけだ」

実にあっけらかんと言いつつ、正平さんは無邪気に笑った。

「……そうか」

まさかそんな立ち入った話が出てくるとは思わなかったのだろう。

「…………… 由比さん」

葛木さんは肩を落とすと、申し訳なさそうに頭を下げた。

「立ち入った話をさせてしまったね。本当に申し訳ない」

「いいえ。別に…… 本当のことですから」

謝られたところで、どういう顔をすればいいのかわからない。そのまま自分の膝に乗せた手のひらを凝視していた。

まさか正平さんがわたしの生い立ちを話すとは思っていなかった。

いくら親しい間柄とは言え、聞かれもしない身内の恥をさらすこともなかるうと思った。

なぜ正平さんが葛木さんにこんな話を聞かせたのか。

後になってから違う形で理由を知るとは、この時は思いもなかった。

十三 来ない理由

その夜、久しぶりにあの人が訪れた。

今夜は空が晴れていて、月明かりだけでも十分くらいの夜だった。

今日は知らない人と話をしたせいだろう。気持ちが高ぶってなかなか眠れそうになかった。けれど、夜が更けていくにつれて目は冴え渡り、寝返りを打つのももう飽きた。

「……………ああ、もう」

のそり、と起き上がる。這うようにして蚊帳の外に出た。開け放った縁側に腰を下ろすと、少しだけ冷たい夜風が心地良い。

真珠色の月明かりは優しく、このまま目を閉じていれば眠れそうな気がした。

冷たい床の上に横たわると、静かに目を閉じる。

離れを包み込む穏やかな虫の音。湿った土の匂いと、清涼な草の匂い。

——きつと、これなら眠れる……。

ゆるゆると眠りに包まれようとする中、冷たい物が頬に触れた。

……何？

頬から冷たい気配が離れ、今度は額に降りてくる。冷たくて大きな手だった。汗ばんだ額の熱が引いていくようで気持ちがいい。

「誰……？」

再び頬を撫でるその手を、無意識のうちに掴んでいた。薄っすらと瞼を開くと、わたしを見つめる黒い瞳とぶつかった。

「生きていたか」

感情を置き去りにした声が、冷たく耳朵を打つ。

葛木さんの声が似ていると、どうして思ったりしたのだろう。この人のたったひと言が、鋭い刃のように胸に突き刺さる。

「……お久し振り」

わたしはできるだけ平気な振りをする。

この人の目的はわかっている。わたしがまだ生きているかどうか、確かめに来たのだろう。

餌が生きていると確認すると、急に興味が失せたようだ。もう用など無いのだと背を向けた青年が無性に腹立たしかった。

「……何よ」

気が付くとわたしは不満の声を上げていた。

「約束が違っんじゃない？」

青年は足を止めると、振り返って訝しげな視線をわたしに向ける。青年が反応を返してくれたから、気が大きくなったのかもしれない。起き上がり縁側から降りると、下駄を爪先に引っ掛けるようにして青年の元へ駆け寄った。

「……約束？」

まるでわからないと言った風に、青年は目を細める。その如何にも「まったく覚えておりません」という様子が癪に障る。

「半月、経ってるけど」

告げたものの、青年からの反応はまったくくない。だからつい大きな声を出してしまった。

「前に会ってから、半月も経っているけれど！」

——話し相手になって欲しい。

この身を喰わせる代わりに、話し合相手になって欲しいと。そう約束をしたはずなのに、この人は半月も姿を現さなかったのだ。

今までだって、そんなに頻繁に姿を現しはしなかったし、そういうものだと割り切って気にしていないつもりだった。

「半月も経っているのに……」

でも、多分葛木さんの声を聞いてしまったせいだろう。話し方だって、見てくれだってまったく違うというのに、葛木さんの声を聞くたびに、この人のことばかりが頭に浮かんだ。だから……。

「……………」

だから、何だというのだろうか？

青年の袖を掴もうと伸ばし掛けた手を止める。

この人のことを思い出したから、何だというのだろう。そもそもわたしはどうしてそんなことくらいで憤っているというのだろう。

行き先を見失った手を、胸元に引き寄せて握り締め、じり、と後ずさりをする。

「半月の間、何をしていたよ……勝手だけど」

自分でも莫迦みたいだと思う。でも、わたしばかり、この人のことばかりを考えていたみたいで悔しかった。

「その間に、わたしが逃げたらどうするつもり？」

挑むように問う。青年はしばらくの沈黙の後、ぼそりと呟いた。

「お前には………ない」

「……？」

よく聞き取れない。聞こえなかったと告げると、青年はもう一度くり返した。

「お前には……行く宛てなど、無い」

感情の欠片も見当たらない声で、淡々と事実を告げる。

「……っ！」

反論をしたくても、その余地など皆無。この人の言い分は、まっ

たくをもつて正論だった。

この人の言うとおり。わたしには、どこにも逃げるような場所などない。

ここ以外に逃げるとすれば……あの世か地獄しかないだろう。

「……そうね」

悔しい。わたしは下唇を噛みしめると、青年に背を向けた。今にも泣いてしまいそうで、顔を見られなくなかったから。

「じゃあ、おやすみなさい」

早く戻らなくては。

気持ちが急いでいたせいかもしれない。駆け出そうとした瞬間に、足がもつれて派手に転倒してしまった。

「い……た」

転んだ痛みよりも、羞恥心の方が勝った。すぐさま身体を起こし、何事もなかったかのように立ち上がる。脱げ落ちた下駄の片方を拾い上げ、少し離れたところにもう片方を見つけ、拾おうと腰をかがめた時だった。

「わっ?!」

足が地面から浮き上がる。気が付くと青年が、まるでわたしを荷物のように肩に担いでいた。

こんな細い腕のどこに、こんな力があるというのだろう。不安定な体勢に、わたしは身体を硬直させた。

「お、降ろして……」

懇願すると、すくと縁側に降ろされた。

あまりにも呆気なく解放されて茫然としてしまふ。わたしの顔をじつと見下ろす。

「……なに？」

「血が」

ぼそりと青年は囁く。

「血？」

細い指でわたしの唇をそつと撫でる。青年の白い指には、薄つすらと赤い血がこびりついていた。

「あ……切ったんだ」

気が付くまで痛みなどなかったのに、血を見た途端にずきずきと痛みだすから不思議だ。舌先で傷口に触れると、鉄の味が口の中に広がる。指で触れると、さっきよりも量の多い血が付いている。

「……………」

血を見ると、あの夜を——祖母のお通夜の夜を思い出す。

畳に散った血飛沫。金臭い血の匂い。そして……血まみれになった、この人の姿を。

急に身体力が抜けてきた。血で汚れた指先を、ぎゅっと手の中に握り込む。

「……痛むか？」

思い掛けない言葉をだつた。驚いたけれど、かろうじて頷くことだけは出来た。

「平気」

怯えを悟られまいと、俯いたまま強い口調で答える。

「見せてみる」

「いや」

無理だ。今この人の顔を…… ともに見ることもなんかできない。血の匂いは、あの日の夜を鮮明に思い出してしまふ。きっと化け物でも見るような目を、この人に向けてしまつたろう。

そんなのは、嫌だ。

頑なに顔を上げまいと俯いていると、今度は青年の方がしゃがみこんできた。静かな瞳と視線がぶつかる。

思つてもみないこの人の行動に、ただただ驚いて、さっきまで考えていたことなど吹き飛んでしまった。青年のもつれた髪が頬に触れ、少しくすぐったくて軽く目を閉じた途端、冷たくて柔らかくて、湿ったものが唇の傷に触れた。

小さな痛みに身じろぎをすると、まるで傷を癒すかのように、ゆっくりと唇をなぞる。

瞼を開くと、息が掛かるほど近くに青年の顔があった。状況が掴

めず、ただ茫然としていると、青年の顔が再び近づく。

「ま、待って……」

さっきの感觸の正体を漠然と悟り、わたしは弾かれるように青年から離れた。青年は相変わらぬ無表情で、ひとりで慌てふためくわたしを不思議なものをみるように眺めている。

「……何をするの！」

あまりにも変わらないその態度に、わたしはつい声を荒げてしまふ。

「まさか舐めれば治るとでも思ったわけじゃ……」

すると青年は訝しげに目を細める。

「治らないのか？」

青年の言葉に、絶句してしまう。もちろん普通の人とは違つから、ある意味を持つての行動ではないとは思っていた。

「そんなことで治るわけ、ないじゃない」

獣じゃあるまいし、と口には出さず思っていると、青年はゆつくりと立ち上がった。

「俺は……そうしてきた」

「え？」

「これまで受けた傷は、そのようにして治してきた」

それ以外の方法は、他にあるのかと言われているような気がした。もしかすると、その一言には色んな意味が含まれているのかもしれない。でも、その言葉に対して何を言うべきなのか、どう汲み取るべきなのか、わたしにはわからなかった。

「……わかった、でも」

改めて口に出すのは恥ずかしい。でも、今後のことを考えると、これだけは言わねばならないだろう。

「ここは……唇は駄目」

ちらりと青年を見る。さっぱりわかっていない様子だ。

「ここは、あの……だから……好意を、好意以上の気持ちを持っている人以外は……触れちゃ駄目なの」

やっぱり恥ずかしくて堪らない。言い終えたわたしの頬は、熱いくらいに熱を帯びていた。

「それに、あんなことをしなくても、お薬を塗れば平気なの！」

赤い顔のまま、きっぱりと言い切ると、ひと仕事終えたような気分だった。小さく息を吐き出すと、黙っていた青年が口を開いた。

「あの男……」

「え？」

「あの男だったら？」

あの男、と言われて、真っ先に頭に浮かんだのは葛木さんの顔だった。

「ど、どうして？」

「好意を、持っているのだろう？」

「違うわよ、あの人は、この家の客人で……ただそれだけ」

激しく頭を振って否定する。熱が引いてきた頬が、再び熱を帯びる。

「だが……嬉しそうだった」

青年はぼつりと呟くと、思い出すように遠い目をする。

「あの男と話をするお前は、ひどく嬉しそうだった」

「見てた、の？」

青年は無言で頷く。その一言で気が付いた。半月の間、この人が姿を現さなかった理由が。

「だってお客様なんだから、つまらなそうにしていたら失礼でしょう」

確かに葛木さんと話をするのは楽しい。優しいし、とてもいい人だ。素敵な人だとも思う。

でも葛木さんが話をする度に、この人と重ねていたというのもあった。この人が笑ったらこんな雰囲気なのだろうか、想像をするだけで嬉しくなった……なんて、言えるわけがない。

「それに、わたしは」

この人は、このままだと葛木さんが帰るまでずっと出てこないつもりだ。

だから、これだけは言っておかないといけない。

「わたしは、あなたを……待っていたの」

そう、待っていたのだ。

ずっと待っていたのに、全然姿を現してくれないから……寂しかった。ただそれだけなのに。

「……だから」

何か言わなければ。でも、上手い言葉が見当たらない。結局わたしは口をつぐんでしまい沈黙が訪れる。

今まで意識していなかったのに、虫の音が妙に大きく聞こえるから不思議だ。沈黙が長くなるほどに、恥ずかしさがじわじわと込み上げる。

「………待っていた？」

「………そうよ」

「俺、を？」

「他に誰がいるのよ！」

恥ずかしさを紛らわすように、きつい口調になってしまう。

「え、と……とにかく。約束は守ってよ！」

勢い良く立ち上がる。恥ずかしくて堪らなくて、青年の顔が見れ

ない。

「おやすみなさいっ」

わたしは転がるように家の中へと逃げ込んだ。力任せに障子を閉めると、蚊帳をくぐり、薄手の布団を頭から被る。

胸の鼓動が速い。それがどうしてなのか自分でもよくわからない。

無意識のうちに、そつと唇に触れてみる。

何故、わたしの傷を癒そうとしたのだろう。何故、あんなに優しく触れるのだろう。

「……ただの餌だと思ってるくせに」

本当に訳がわからない。

暑苦しいのを我慢して、わたしは何とか眠ろうと努力した。けれど、結局その晩は一睡もできないまま、朝を迎えた。

十四 手紙

お盆が終わると、明日には東京へ戻ると正平さんが言い出した。

「もう少しゆっくりしていけばいいのに……」

あからさまに彰子さんは渋面になる。

「すみません。そろそろ試験が近いですし、来年の卒業まで勉学に励みたいと思ひまして」

好青年の顔で正平さんは言う。本当は「卒業まで羽根を伸ばしていたいからね」と本音を聞いたばかりなので、わたしと葛木さんは思わず顔を見合わせてしまう。

「身体だけには気をつけるように」

最後に寡黙な父が厳かに重たい口を開いた。

「はい。父さん」

この時ばかりはさすがの正平さんも、少し緊張したように、お行儀の良い笑顔で頷いた。

「僕はこの界限じゃあ模範的な息子さんで通っているからさ」

両親から解放されると、正平さんは陽気に笑った。

「莫迦者が。ご両親に申し訳ないと思わないのか」

呆れたように葛木さんは眉をひそめると、正平兄さまは少し苦い顔になる。

「わかってるさ。好きなことができるのは今だけだから、父も母も好きにさせてくれているんだよ」

「へえ、ただの放蕩息子じゃなかったんだな」

「こんな真面目な俺のどこが放蕩息子だというんだ」

時折喧嘩のようになり、二人して笑いあったり。親しげに談笑する二人の間で、わたしはろくに口も挟めず途方に暮れていた。母屋では両親に気を使って居ずらいと、二人はよくここで談話をしている。

わたしの部屋だというのに、いつもと違う雰囲気でも落ち着かない。いつもこの離れにはわたしと、あの人だけだ。当然お喋りなどしないから、いつも静まり返っている。

落ち着かないのは、多分、葛木さんの声のせいだ。

葛木さんはよく笑う。正平兄さまは陽気に笑うけれど、葛木さんは少しはにかむように、柔らかい声で笑う。

……あの人が笑ったら、こんな風なのだろうか、ありもしない想像をしてみるが、一体どんな意味があるというのだろうか。

あの人が笑うわけがないのに。

ちらりと、庭先に視線を向ける。木陰に佇む墨染衣を纏った青年の姿に、わたしはとづくに気が付いていた。

どうせこの二人には、青年の姿は見えないのだ。気にせずこちら

にくればいいのに、一向に近付こうとしない。

でも一応姿を見せてくれるということは、この間のわたしの話を、ちゃんと聞いていてくれたということだろう。

『わたしは、あなたを……待っていたの』

我ながら、なんて恥ずかしいことを言っているのだろう。

それに……。

そつと、まだ傷がいえない唇に触れる。

あの夜のやり取りを思い出すだけで、みるみる頬が熱くなってくる。

「由比」

正平さんの声で我に返る。

「あれ？　顔が赤いみたいだけれど、熱でもあるのか？」

他人が気が付くほどに赤くなっているのだと自覚した途端、ますます頬が赤らんでくる。

「……多分、昨日転寝をしてしまったから……だと思います」

少々苦しい言い訳を口にする、正平さんは何も言わずにほほ笑んだ。そのほほ笑みにどんな意味が含まれているのかとても気になるけれど、追及する気にはなれなかった。

「そうか、調子が悪いというのに長居をして申し訳ない。そろそろ

母屋に退散するよ」

正平さんはおもむろに立ち上がると、腰を浮かし掛けた葛木さんの肩をぽんと叩いた。

「じゃあ、あとはお前に任せた」

「えっ、いや……」

正平さんに座布団の上に押し戻された葛木さんは、何ともいえない複雑な面持ちだった。よく見ると顔色もあまりよくない。

「じゃあ頑張つて」

「……………ああ」

能天気な笑顔を浮かべる正平さんと相反して、葛木さんは顔色も悪い上、沈鬱な表情で痛々しいこと極まりない。

ひらひらと手を振りながら正平さんが退散すると、部屋は居心地の悪い雰囲気にも包まれた。

「何を頑張るのですか？」

訊ねると、葛木さんは困ったように頭を掻きまわった。

「あの……………ですね」

しばらくの沈黙の後、落ち着かない様子で葛木さんは視線を落とした。

「大丈夫ですか？ 顔が真っ青ですけど」

「え、ああ………… 大丈夫。それよりも、聞いて欲しい話があるんです」

改めて正座をし直すと、わたしの方へとにじり寄った。そして、緊張した面持ちでわたしを見つめる。

どきり、と胸が鳴った。

「実は、お願いがあるのですが……」

ひどく思い詰めた表情で俯いていた葛木さんは、擦れた声でこう告げた。

「手紙を書いてもいいですか？」

「手紙？」

「はい。どうぞでしょうか？」

あまりにも大真面目に聞くものだから、わたしはつい笑いそうになってしまう。でも、葛木さんが今にも倒れそうなくらい緊張しているのが伝わってきて、笑ってはいけなさと感じていた。

「いいですよ、手紙」

年上の男の人なのに、何だか可愛らしく思えてしまう。わたしは小さな子供を宥めるように、慣れない笑顔を浮かべてみせる。

「楽しみに待っています」

「……ありがとうございます」

葛木さんは本当に嬉しそうに、くしゃりと笑った。わたしも葛木さんの笑顔につられて、自然と笑顔になっていたのかもしれない。

ふと、背中に強い視線を感じて思わず振り返った。

「どうしました？」

少し驚いたように葛木さんが訊ねる。

「いえ……あの、猫の鳴き声が」

「猫？」

「……でも、空耳だったようです」

「そうですか。でも、この庭はどうやら猫の通り道のようなので、私が気が付かなかっただけで、由比さんの耳には届いていたかもしれませんよ」

「そうですね……」

和やかに猫の話をしながら、わたしは今も感じる視線を意識していた。

きつとあの人だ。

『あの男と話をするお前は、ひどく嬉しそうだった』

多分、今、わたしは嬉しそうにしていると思う。葛木さんと話するのは楽しい。穏やかな人柄に触れて、心がほっと和む。でも本当は、あの人と葛木さんを重ねて、ありもしない想像をして喜んでいる。

もしかすると、わたしは酷いことをしているのかもしれない……。

葛木さんは、今目の前にいるわたしの相手をしているというのに、わたしは彼を通して違う相手を見ているなんて。

「由比さん、どうしました？」

「……え？」

顔に何か付いているだろうか。じつとわたしの顔を見つめると、心配そうに目を細める。

「何だか少し……悲しそうだ」

いつの間にか彼の大きな手が、わたしの頬を包むように触れていた。

あの人とは違う、暖かい手。

そう、人の手は暖かい。

あの人の手は……どうして冷たいの？

だってあの方は……人ではないから。

わかってている。最初からわかってはいるはずなのに……何故だか胸が締め付けられるように痛い。

「由比さん……」

囁くように名を呼ばれ、ふと視線を上げる。

「……………」

驚くほど近い距離で、葛木さんと視線が絡む。彼の真剣な眼差しをどう受け止めたらいいいのかわからなくて、慌てて視線を泳がせる。

「由比さん、私は……」

彼の親指がわたしの唇に触れた。

「……っ！」

まだ傷が残る唇に、ぴりつとした痛みが走る。わたしの小さな悲鳴に驚いたのか、葛木さんの手が慌てふためくように離れた。

「も、申し訳ない……！」

我に返ったかのように飛び退くと、畳に額を擦らんばかりに頭を下げる。

「いえ……」

さすがに今の状況が、どんなものだったから理解できないほど子供ではない。でも、こういう時、葛木さんにどんな顔をすればいいのかわからなかった。膝元の畳の目を数えることくらいしかできない。

「本当に申し訳ない。今のは忘れてください……」

はい、と頷こうとするが。

「……いえ、やはり忘れないでください」

「え？」

驚いて顔を上げると、赤い顔をした葛木さんがそこにいた。わたしと目が合つと、さらに頬に赤味が増したような気がした。

「手紙を、書きます」

「……はい」

「待っていて、くださいますか？」

「……待っています」

葛木さんのあまりにも真剣な様子に、わたしは大きく頷くことしかできなかった。

それから、半月も経たないうちに手紙が届いた。

十五 都忘れ

わたし宛の手紙が届いた。味気のない白い封筒に、少しだけ右に傾いた文字でわたしの名前が記されていた。

送り主は、もちろん葛木さんだ。

「お嬢さん。いいものが届きましたね」

この間の方でしょうか？ と手紙を手渡しながら、妙さんは意味深に含み笑いをする。

「そんなものではありません」

あの時の真剣な葛木さんの面持ちを思い出すと、自然と頬が熱くなる。

でも妾の娘だとわかっていて、本気で相手にするわけがない。けれど、少なくとも葛木さんは人をからかったりするような人には思えない。

「多分、正平さんに頼まれたのよ」

肩身の狭い腹違いの妹に情けを掛けてくれと。きっと乗り気じゃなかったから、あんなに気分が悪そうだったのだろう。

「きつと、いい方なんだわ」

手紙の内容は、他愛のないお天気や季節の移り変わりについてや簡潔な近況報告だった。あまり上手な字ではないけれど、丁寧に書くようとしているのが伺える。

封筒には、まだ何かが入っているようだ。逆さまにしてみると、すくと手のひらに落ちてきたのは、都忘れの押し花が入ったしおりだった。

「きれい」

厚紙と透かし紙に挟まれた都忘れの押し花は、花びらの紫色も鮮やかなままだ。もしかして手作りだろうかと思いつながら、上にかざしてみたり、裏返してみたりする。

よく考えてみたら、誰かに何かを頂くのは初めての経験だった。しかも大好きな初夏の花を、こうしていつでも見れるなんて。我ながら単純だとは思いつけれど、やっぱり葛木さんはとてもいい人だと思った。

いい人、だけ？

自分の心に訊ねてみる。

葛木さんから手紙を貰って嬉しいのは本当だ。本当だけれど、どこか心の底には後ろめたさに似たものが沈んでいるような感じ。

もつと嬉しと思えたらいいのに。

あの時の葛木さんの言葉や眼差しで、心がいつぱいになればいいのに。

どんなにそう願っても、瞼を閉じると浮かんでくるのは葛木さんじゃない。墨染の衣姿のあの人が邪魔をする。

どれだけ目を閉じていたのだろう。もしかすると眠ってしまつて

いたのかもしれない。固く閉じていた瞼をゆっくりと開くと、辺りは淡い朱色に染まっていた。自分の手も、庭先に咲く草花も、土も、空も何もかも。けれど、わたしの目は庭の片隅に佇む黒い影帽子に釘付けになってしまう。

この人の存在は、静かな水面にさざ波を立てる気まぐれな風のように。姿を、気配を感じるだけで、こんなにも気持ち揺れ動いてしまう。心はいつだって、この人の方へと向いてしまう。

……悔しい。

わたしの命が尽きる日を待ちわびているような相手のことを、こんなにも気にしてしまうなんて。どこにいるのだろうと、その姿を目で追ってしまうなんて。

わたしは……本当に莫迦みたいだ。

もつれた黒髪が覆う背中を睨みつけていると、視線に気づいたかのように、ゆっくりとこちらを振り返った。たったそれだけのことだというのに、胸が締め付けられるように苦しいくせに、甘い思いが満ちていくような不思議な感覚に囚われる。

こんな些細なことで心がいっぱいになるなんて、認めたくなかった。込み上げてくるこの気持ちは何なのかなんて知りたくもない。わたしは「その何か」を押さえつけるように、勢い良く庭先に降り立った。

「ねえ。見て」

無理やり明るい声を上げながら、夕陽色に染まったあの人の元へ

と駆け寄った。

「きれいでしょう?」

葛木さんから貰ったしおりを、自慢げに差し出した。でも案の定返事はなく、虚ろな目をこちらに向けるだけだった。

この人が押し花のしおりなどに興味を示さないことなどわかっている。

「きれいでしょう?」

何度訊ねたところで、何か反応が返ってくるとは思えなかった。諦めてしおりを持った手を引つ込めようとした時、あの人の手が伸びてきた。

「……これは?」

わたしが持っているしおりを手にとると、静かな目で見下ろす。驚いた。まさかの興味を示してくれるなんて思っていなかったから、すぐに言葉が出てこなかった。

「都、忘れ」

やっとの思いで吐き出すと、あの人は不思議そうにくり返す。

「みやこ、わすれ?」

「この花の名前。きれいでしょう?」

彼がわたしの話に興味を持ってくれたのが、また嬉しくてたまらなかった。

「ある方が、手紙と一緒に送ってくれたの」

葛木さんが、言い出すことができなかった。この人と葛木さんを重ねて見ていたことを見透かされそうで恥ずかしかったのかもしれない。

すると突然、興味を失ったかのようにしおりをつき返してきた。一体どうしたのだろう。わたしが驚いている間に、あの人は背を向けてしまう。

「……っ」

待つて。

喉まで出掛かった言葉を飲み込む。呼び止めても無駄だと知っていたから。

色褪せた墨色の背中とは、次第に深まりつつある夕闇の中へと溶け合うように消えてしまった。

寂しい——なんて思わない。

そもそも、自分が死ぬのを待ちわびている相手に「寂しい」と感じることはおかしいのだから。

——いつものことだ。

それでも彼が消えた場所から、なかなか目を離せない。

「莫迦みたい」

莫迦みたいじゃなくて、莫迦だ。

あの人が消えた庭先から無理やり視線を引き剥がすと、目元を手の甲でごしごしと擦った。

十六 あざみの花

その日の夜は少し寝苦しくて、寢床に入っても、なかなか寝付けなかった。

秋を迎えたとはいえ、まだ蒸すような暑さが続く日もあった。少し夜風に当たろうと身を起こした時、障子に浮かび上がった人影を目にして思わずぎょっとした。

誰。と問わずともわかっている。

わたしは寢床から這い出すと、そろりと障子を開いた。硝子戸越しにあの人と対面する。

どうしたのだろう。同じ日に二度も姿を現すなんて珍しい。

硝子戸を引き開けると、突然何かを突きつけられた。

「っ、何？」

なにやら草の束のようだ。恐る恐る手を伸ばすと、ちくりと手のひらに痛みが走る。

「これは？」

あの人の手の中から落ちてきたものを拾い上げる。

花びらは紫色。葉や茎には細かい棘がある。痛くないように指先でそつと拾い上げる。

「あざみ？」

野山に咲いているあざみだった。きれいだが棘のせいで、いつも

摘むのをためらってしまう。なのに彼は、素手のままであざみの花を握り締めているではないか。

「手、棘が……早く離さないと……」

怪我をしてしまう。けれど彼の手は、しっかりとあざみの束を握り締めたまま。受け取れと言わんばかりに差し出していた。

「もしかして、わたしに？」

わたしの問いに静かに頷いた。

「……………でも」

嬉しいと思うよりも、先に戸惑いを感じてしまう。

でも……………どうしてこの人が、わたしに花を？

目の前に突きつけられた花束を触れることも出来ずにいた。わたしがいつまでも受け取るうとしないからか、彼は諦めたかのように腕を下ろしてしまう。

途端にあざみの花が、彼の手からばらばらとこぼれ落ちてゆく。

「あ……………」

どうしよう。後悔の念が一気に押し寄せる。慌ててあざみを拾い集めようとするけれど、やっぱり棘が怖くてなかなか手が出せない。

「あの花の代わりだ……………」が

あの花？

頭上から落ちてきた低い声。思わず顔を上げると、一瞬視線がぶつかる。

「愚かだな」

笑ったのだろうか。あの人はかすかに唇を歪めると、ゆっくりと背を向け夜闇の中へ身を投じた。

もしかして……。

誰もいなくなつた庭先で、わたしはひとりぼんやりと考えた。

わたしの持つていた花。恐らく葛木さんがくれた押し花の花。青みがかつたきれいな紫色の都忘れ。

見つからないから、同じ色をしたあざみを摘んできてくれたのだろう。

でも、どうして？

理由を聞きたくても、その晩、あの人はもう姿を見せてはくれなかった。

十六 あざみの花（後書き）

ずいぶん短めになってしまいました。
ぼちぼちと更新していきたいと思います。

十七 縁談

それからというものの、葛木さんからは頻繁に手紙が届くようになった。

最初はどうとも思わなかったけれど、いつの間にか手紙が届くのを心待ちにしている自分に気が付いた。

手紙の内容は他愛もないことばかり綴られているけれど、自分の知らない世界に触れているようで楽しかった。

三度に一度の割合で、葛木さんの手紙にはちょっとした贈り物が同封されている。

雑誌の切り抜きや、活動写真のチラシ、絵葉書とか。

わたしがそんな子供騙しで喜んでいる頃、郡司の家と葛木さんの家との間で、ある話が急流のような速さで進んでいるとは夢にも思っていなかった。

* * * *

山の木々が赤や黄色に染まり、海から吹く風もすっかり冷たくなった。庭の木々の葉を落とし、縁側から見る光景も寂しいものに変わっていた。

掃き集めた落ち葉で焚き火をしよう。

いつになく庭の手入れに専念していると、普段なら滅多に離れに顔を出さない彰子さんが姿を現した。

「おはようございます」

古めかしい柄の着物と、きりりとひつつめた白髪交じりの髪。きれいな人だけれども、どこか冷たい印象を拭えない。

「由比さん。少しお時間よろしいかしら」

よろしいかしら、と言いつつも、わたしの都合など関係ない。仕方がなく手を止める。

「はい」

素直に返事をする、彰子さんの目が穏やかな形に細くなる。切れ長の目は、やっぱり正平さんに似ていると思った。

竹箒を庭の片隅において、わたしは彰子さんの後に続いた。

一体これから何が起ころうというのだろう。急に不安になってきた。母屋の敷居を跨ぐのは久しぶりだ。余所の家匂いがするのも変わらない。

無言のまま客間に入ると、すでに上座には父が座っていた。

わたしは床に膝を付いて一礼すると、膝を客間へとすべらせて下座に着いた。

父と彰子さんが目の前に並んでいると、目のやり場に困ってしまった。俯いて、膝に置いた自分の手ばかりを眺めながら、二人が話を切り出すのを待った。

父が口を開いたのは、お茶を運んできた妙さんが去ってからだった。

「お前の嫁入りが決まったぞ」

え？

突然何を言い出すのだろうと思っていると、今度は彰子さんが口を開いた。

「お式は葛木さんのご実家で挙げるそうですよ。あの方は次男坊だから、お住まいは東京だそうよ。舅も小姑ともいなくて気楽でいいでしょう」

嫁入り？ 葛木さん？

一体この人たちは何を言い出すのだろう。

戸惑うわたしを置き去りにして、二人は話を進めてゆく。

「式はお正月明けにしましょうと言うお話です」

「あなたの身の上を聞いても、構わないといってくださいているのよ」

「あちらの家で恥ずかしくないよう花嫁修業を明日からでも始めないといけませんね」

寡黙な父に代わって、彰子さんが次々と言葉を並べる。彰子さんだつて、けしてお喋りな方ではない。なのに今日はどうしたというのだろう。人が変わったかのように、ぺらぺらと時折笑いを交えながら縁談話を続ける。

この人は誰？

いつも冷静で、笑顔も滅多に見せない彰子さん。

この饒舌な女の人是谁？

今すぐここから逃げ出してしまいたい衝動に駆られる。でも実際にはそんな真似などできななかった。

頭の上を通り過ぎる自分の縁談。まるで他人事のようだ。いつから葛木さんとの間で、こんな話が持ち上がったのか知るよしもない。知ったところで、わたしにはどうにもならない。

結婚なんて家同士がするものだ。わたしの意志など関係ない。

聞くところによると、どうやら葛木さんは、わたしをひと目で気に入ってくれたらしい。どこを気に入ったのかは知らないけれど、正平さんがそう言っていたという話だ。

本当にわけがわからなかった。狐につままれたというのは、こういうことをいうのだろう。

葛木さんは、いい人だと思う。でも、好きかどうかなどという気持ちは沸いてこない。

顔も知らない、どんな人かもわからない相手の元へ嫁に行くよりは、ずっとましだと思う。だからと言って、本人が知らないところで勝手に話を進められて面白いわけがない。

でも困ったことに、わたしには嫌だと言う権利はない。

——そうか。

わかってしまった。二人は早くわたしを追い出したいんだ。だからこんなに、この縁談に乗り気なんだ。

「このお話、進めてもいいでしょう？」

進めても言いも何も、わたしの意志など関係なしに進めるつもり
のくせに。

膝を、爪が白くなるくらい強く握り締める。

ここで怒鳴ってやったら、どんな顔をするだろう？

きっと二人とも、びっくりするだろう。もしかしたら彰子さんは
腰を抜かすかもしれない。

想像しただけで胸が空くような気がした。

だから、もういいや。

「はい……わかりました」

父と彰子さんの顔を見もせず、ごくんと座卓に額をぶつけるほ
ど頭を下げた。

十八 戸惑い

真っ先に、あの人に話さなくてはと思った。

お嫁に行くからしばらくはここを離れるけれど、歳を取ったらここに帰ってくるつもりだと告げるつもりだった。

こっちが勝手に押し付けた約束を、今まで守って一緒にいてくれた。だから、わたしも約束を破るつもりは無いと伝えなくてはいい。

古びたの小さな提灯を手にとると、あの人を求めて庭先をうろついた。

「……どこ？」

あの人を呼ぼうにも、何と呼べばいいのかも知らない。

わたしは本当に彼のことを知らない。何ひとつ知らない。ただ、あの人の人ならぬ者だということ以外は。

「どこにいるの？」

庭先にはいないようだ。待つていれば来てくれるだろうか。

「いるんでしょう……お願いだから」

姿を見せて……と言いかけた時、鋭い獣の鳴き声が耳を叩き打つ。

「っ！」

近所の犬の仕業だと知っていたものの、驚いた拍子に提灯を取り落としてしまう。提灯は崩れるように地面に落ちると同時に赤い炎

が上がった。

慌てて手を伸ばそうとすると、冷たい手に遮られた。背後から抱き締められ、身動きが取れなくなる。

誰、と問うまでもなかった。

「何をしている」

低く掠れた声が、耳元でわたしを責める。

「でも、提灯が」

「放っておけ」

小さな提灯が燃え尽きるのは早かった。炎の舌が全てを舐め尽くすように提灯を包み込み、呆気ないほど簡単に灰に変えてしまう。

「あ……」

火が消えた途端、目を覆うような夜闇に包まれた。その後も、どちらから離れるでもなく、ただ闇の中で身を寄せ合うようにして立ち尽くしていた。

こうして暗闇の中だと、不思議と互いに触れ合っているとこるばかりを意識している自分に気が付く。わたしの肌に触れている冷たいはずの腕が、手が、熱を帯びたように感じるのは何故だろう。

わたしはこの人の取る行動に、ひどく戸惑っていた。

そう……あざみの花を差し出された時のように。

もし、あの時。花を受け取ればよかったと、あれから何度思っただろう。

この人が、わたしのために摘んでくれた野の花。

どういつつもりで、そんなことをしたのか、いまだにわからない。

あの時は、ただ驚いて、戸惑うばかりで、どうすることもできなかった。

今も同じ。ただ驚いて、戸惑うことしかできないなんて。

「ありがとう」

肩に触れている彼の手に、そっと触れてみる。途端、その手が小さく跳ねる。

「……何がだ」

相変わらず抑揚のない声に、ほんのわずか戸惑いが交じったような気がした。

「何がって……」

今だって、彼が止めてくれなかったら、恐らく燃え上がった提灯の火で火傷を負っていただろう。

他にもいくつもお礼を言うことはある。

あざみの花を摘んでしてくれたことも、それから何よりも——いつもではないけれど、こうして側にいてくれる。

「ええと……色々」

慌てて答えたものの、ずいぶん間抜けなものになってしまった。もっと気の利いたことを言えないものかと悔んでいると、微かに耳を掠めた息遣いが、まるで笑ったように聞こえた。

驚いて振り返ろうと身じろぎをした途端、わたしの身体を支えていた腕が、するりと離れていく。
突然消え去ってしまった感触が、ひどく名残惜しい。

「待つて」

無意識のうちに動いた指が、墨染の衣の裾を掴んでいた。

「あの、わたし……」

声が震える。言わなければいけないのに、胸が、息をするのが苦しくて上手く言葉が紡げない。

「わたし」

その先が続かない。唇を噛み締め、からからに乾いた喉を潤そうと唾を飲み込む。

「わたし……」

彼は辛抱強く待つていてくれた。早く言わなくては。早く告げなくては。

お嫁に行くことになったの。
でも、必ず帰ってくる。

何十年も先になってしまいかもしれない。
でも、だけど、だけど、必ず帰ってくるから。

だけど、わたしの口からは思いもよらない言葉が飛び出した。

「わたし、を——殺して」

自分で言ったにも関わらず、自分の言葉に驚いた。
何を言っているのだろうか？

驚きつつも、その方法があったのだと今更になって気が付いた。

——そうだ。今、死んじゃえばいいんだ。

墨染の衣を堅く握り締めると、わたしを見下ろす暗い瞳を見つめる。

「今すぐ殺して」

どうして今まで思いつかなかったんだろう？

「わたしを食べて……」

そうだ。そうすればこの人との約束を破らなくて済む。

「お願い」

掠れた声で懇願する。

でも、彼は静かな目で見下ろしたまま、身動きひとつ取ろうとしない。わたしは焦れたように彼の袖を引いた。

「お前は……」

袖を握り締める手の上に、自らの手を重ねる。包み込むように大きな手は、壊れものに触れるかのように、そっとわたしの指を撫でる。

「お前は……俺の糧だ」

わたしの目を見つめたまま、ゆっくりと、心に刻みつけるように
呟く。

「お前は、糧だ。 お前が死んだら……その死肉を残らず喰らう」
「だから今」

殺してと、続けようとした言葉を彼は遮る。

「お前が死んだら、な」

ふと、闇色をした瞳が和らぐ。

その瞳を目にした途端、何も言えなくなってしまった。いつの間
にか浮かんでいた涙が、目尻から伝い零れ落ちる。

長くて細い指が、わたしの瞼に触れる。指に促されるように、そ
っと目を閉じると、新たな涙が頬に零れた。

ゆっくりと袖を掴んでいた手が解かれる。軽く頬を撫でる指の感
触が、また戸惑いを生む。

どうして？

どうしてそんなに……優しく触れるの？

あの人の指が触れた部分が熱い。その熱が身体の芯まで沁みとお
って、胸がきりきりと痛む。

どうして冷たい指が触れた場所が熱いのか。

どうしてあの人の瞳を見ると、こんなにも胸が痛むのか。

わからなかった。わかりたくなかった。
ただ夜風が濡れた頬を冷たく撫でてゆく。涙が乾くまで、わたし
はその場から動けなかった。

十八 戸惑い（後書き）

久々の更新になってしまいました…。

十九 さよなら

縁談の話を境に、慌しい日々が始まった。

この町に来てからというものの離れに閉じこもりがちだったのに、信じられないくらい外出する機会が増えた。ほとんど足を踏み入れなかった母屋にも、頻繁に足を運ぶようになった。

お茶やお花、お裁縫にお料理。嫁入りに必要なものを、彰子さんはすべて叩き込むつもりようだ。

慣れない新しいことをするのはひどく疲れたけれど、気を紛らわすにはちょうど良かった。

昼間は習い事に追われて忘れられる。でも夜になり、ひとりでの離れで過ごしていると、どうしてもあの人のことばかり考えてしまう。

あの人は、あの日を境に姿を現そうとしない。

会いたいという気持ちと、会いたくないという気持ちが交錯する。でも、会ってしまったら、自分の中の何かが変わってしまいそうで怖かった。

祖母の死肉を喰らう姿を見たのが、もうずいぶんと昔のように感じる。でも、あの恐ろしい光景は、今でもわたしの瞼の裏に焼き付いたように離れない。

畳に飛び散った血飛沫。

どす黒く染まった経帷子。

大きな肉塊に食らいつく獣のような姿。

身体中を鮮血で染めたあの人の恐ろしい姿。あの時見せた苦しげな瞳。

『みるな』

絞り出すような苦渋に満ちた声。

『ここから去れ』

あの時は、あんなに恐ろしく感じていたのに。今でも耳に残っているあの人の声は、あまりにも悲しげで、苦しげで。

わたしは……どうかしてしまっただろうか。こんなにも、あの人に会いたくないなんて。あんなにも優しい葛木さんよりも、会いたくて堪らないなんて。

あの人と会えない日が続いた。なのに月日だけはきちんと過ぎてゆく。年を越し、慌しいまま厳しい寒い日々が過ぎていった。

ようやく梅の季節を迎え、かすかではあるけれど春の気配を肌で感じるようになった。

そして、この家で過ごす最後の夜を迎えた。明日の朝、わたしは葛木家へ向かう。

「今日はゆつくりと休んでくださいね」

温まるからと、妙さんが甘酒を持ってきてくれた。

「妙さん。今までありがとうございます」

「いいえ。でも……本当に良かったですね、お嬢さん」

良いことなのだろうか。

確かに、この家で隠居生活を送るよりは幾分ましだろう。少なくとも、葛木さんはわたしを望んでくれたのだから。

「……はい」

そう。きっと良いことなのだろう。

もつと嫁入りの日を迎えるのを、心待ちにしているべきだと思う。なのに心は嫁入りのことよりも違うことに向いてしまっていた。どんなに頭から切り離そうと努力しても、気がつくとその人の姿を探していた。

もう最後の日だというのに、あの人は来ない。

夜が明ければ、もうあの人とは二度と会えない。そう、会えないのだ。

会えなくなつて、あの人の存在がわたしにとってどんなに大きくなっていたのか、今更になつて思い知る。

胸に大きな穴が空いたような虚脱感。ぼんやりしていると、知らないうちに涙を零している時もあった。

……なぜ、こんなにも会いたいと思うのだろうか？

自分の心がわからない。

明日は早いのだから眠らなくてはと思うのに、布団にもぐり込んでも目は冴える一方。ちつとも眠れそうにない。

暗闇の中、むくりと起き上がる。たちまち冷氣に包まれ、ぶるりと肩が震えた。そのまま布団から抜け出し、冷えた畳を踏みしめ障子を開いた。ひたひたと廊下を伝い、そつと庭に面した雨戸を開い

た。

凜と凍てついた外気が頬を刺す。もう真っ暗なはずなのに、外がほんのり明るい。

「……ゆき？」

雪だ。雪が降っていた。

見慣れた庭は白い雪に覆われ、まるで知らない場所のようだ。裸の枝には綿帽子のような雪。剥きだしの土の上には、柔らかな雪化粧。

「きれい」

素足のまま庭の上に降り立った。ふわりとした新雪の感触の後、冷たさが指先や足の裏からじわじわと広がってくる。

舞い落ちる雪を受け止めようと、手のひらを差し出した。

雪はふわりと手のひらに舞い落ち、すぐに溶けて消えてしまう。

空を仰ぐと、視界一杯に白い雪。

寒さを忘れて段々楽しくなってきた。幼い頃、降りしきる雪の中を駆けずり回ったり、雪だるまを作ったり、着物をずぶ濡れにしながら雪玉を投げあったりしたものだ。

空を見上げたままくると回り、そのまま雪の中にあお向けに寝転がった。

雪にまみれながら、小さな頃を思い出してくすぐすと笑う。目を閉じて、雪がふわふわと頬をかすめる感触を楽しんでいた。

こんなところを他の人に見られたら、きつとおかしな娘だと思われるてしまいそう。

そろそろ部屋に戻らないと、風邪を引いてしまう。風邪ひきの花嫁などみつともない。

ふと、周りの空気が変わった。

雪が止んだ……？

そつと瞼を薄く開く。雪明りに浮かび上がったのは、雪と同じくらい白い腕。ぼろぼろの墨染め衣から伸びた、骨張った手が目の前にあった。

——あの人だ。

慌てて目を閉じた。どうやらわたしが目を開いたことに気がつかなかったようだ。

両手を地面について、わたしの顔を覗き込んでいるのだろう。目を閉じていても、ぴりぴりとした視線が伝わってくる。わたしは息をするのも忘れ、身動きひとつ取れなくなっていた。

わたしの冷え切った頬に、そつと何かが触れる。心臓が跳ねあがった。

骨張った大きな手。氷のように冷たい指先が、わたしの髪に積もった雪をそつと払い除ける。

誰なんて、聞かなくてもわかっていた。

覚悟を決めると、ゆっくりと瞼を開く。

雪の上に膝をついて、あの人わたしを静かに見下ろしていた。

……やっと、会えた。

唇が凍えて上手く言葉にならなかった。目の奥が熱い。

ただ苦しかった。胸の奥がきりきりと痛い。言葉を発しようと思えば喉の奥が震える。

目の奥に熱い涙が込み上げてくるのがわかる。見られたくなくて、彼から目を逸らすと、追い掛けるように彼の手が伸びて――冷えたわたしの頬を包み込む。

冷たい手だった。大きくて、雪よりも冷たくて。なのに触れられた途端、胸の奥に火が灯る。

堪えきれず涙が溢れた。

目頭を伝い落ちる涙を、彼の細い指が受け止める。溢れ続けて止まろうとしない涙を拭うように、何度もそつとわたしの頬をなぞる。

「もう二度と、戻ってくるな」

優しく頬を撫でながら、彼は低く囁いた。

「……………どうして？」

「この家から出てゆくお前に……………もう用はない」

――もう用はない。

たったひと言が、こんなにも胸に突き刺さる。

「じゃあ、今は？」

寒さで強張った唇で、この人を繋ぎとめようと言葉を紡ぐ。

「今だったら…………駄目？」

「同じことを言わせるな」

彼は苦しげに目を伏せると、ゆらりと立ち上がった。

「戻ってくるから……」

行かせまいと、すがりつくように叫んだ。

白い雪を薄っすら身に纏った青年は、物言わぬ石像のように微動だにしない。

「絶対に戻ってくるから……お願い」

戻ってくるな、なんて言わないで。

用はない、なんて言わないで……！

熱い涙が、頬を伝って雪の上に落ちた。

拭っても拭っても、涙が溢れて止まらない。どうしてこんなに涙が出てくるのだろう。どうして、この人に必要ないと思われるのが、こんなにも悲しいのだろう？

わかりたくなかった。でもわかってしまった。

でも……。この気持ちは気付いてはいけないもの。

溢れる涙の意味は、心の奥に封をしなければならない。だから、あの人のことで泣くのは最後。ずっと死ぬまで、この胸にしまっておくから、今日だけは……。

「う……っ、く………！」

唇を噛みしめ、必死に泣き声を堪える。堪えた泣き声は涙となつて、尽きることなく溢れだす。大地にすぎるように、雪の上に伏し、久しぶりに子供のように泣きじゃくった。

翌日、わたしは葛木さんのもとへ旅立った。そして、郡司由比から、葛木由比と名を変えた。

二十 それから

結局のところ、葛木の妻としての生活は三年で終わりを告げた。

理由は簡単だ。もう二度と子供を生めない身体になってしまったからだった。

結婚して二年目に葛木家の長男が亡くなった。義兄はまだ未婚だったので、自動的に既婚で次男の夫が、葛木家を継ぐことになってしまった。

わたしに課せられた役目は「跡取りを生む」こと。

ようやく子宝に恵まれ、難産の末に女の子が生まれた。しかし生まれたばかりの赤子は死産だった。

不幸な出来事は重なるもので、わたしは二度と子供が生めない身体になってしまった。その上、普通の生活もままならないほどの身体になってしまった。

病とは無縁だった自分が、こんな身体になるとは夢にも思っていなかった。それほど出産という仕事が大変なものだったのだと、全てが終わってから思い知った。

葛木家は士族の血筋のせいもあって、跡取りとなる男子を待ち望んでいた。子の産めない嫁など必要ない。しかも、わたしの素性は、葛木家でも快く思われていなかった。

気楽な次男坊だからと許してくれたものの、今の夫は葛木家の家長だ。郡司家も家柄だけで言えばなんら問題がないはずだ。でもわたしは妾の娘だ。世間にわたしの素性が知られれば、葛木家の評判

は地に落ちる。

莫迦みたいだ。そんなこと、最初から知っていたはずなのに。
葛木家で、わたしの居場所は存在しない。引導を渡されるのも、
時間の問題だ。

そして、その日はやって来た。

「由比、話があるんだ」

床に伏したわたしのもとへ、夫が浮かない表情で訪れた。とうとうこの日がきたのだと、瞬時に悟った。

「身体の調子が良くなるまで、しばらく実家に戻ったらどうだろう？」

労わるような優しい言葉など聞きたくなかった。

優しくされたら期待してしまう。いつその事、「お前など必要ない」と言ってくれた方がよっぽど親切だ。

まだここにいてもいいのだと、勘違いしてしまうから。

——お前に……………もう用はない。

ずいぶん前にあの人に言われた言葉が、不意に甦る。

ただの思い過ごしや、自惚れかもしれない。

でも、もしかしたら……………わたしが心残りなく、葛木家へ嫁げるようにと言ってくれたのだったとしたら？

あの言葉は、あの人なりの優しさだったのかもしれない。

わたしが返事に困って押し黙ってしまったのだと誤解したのだろう。夫は慌てて言い繕った。

「いや、お前が嫌なら無理にとは言わない。だが、ここで過ごすよりも、ご実家の方が気も楽だろうと思っただけで……」

相変わらず、嘘が下手な人だ。

でも、気の優しい夫が、これを言うのにどれだけの葛藤があったのか。最近、作り笑顔すら見せなくなった夫を見ていればわかった。

「壹夜さん」

久しぶりに夫の名を呼ぶと、寢床から起き上がり、精一杯の笑顔を浮かべた。

「お言葉に甘えて、そうさせてもらいます」

最初から答えは決まっていた。

帰ろう。

あの海と山に挟まれた、小さな町へ。……あの人のもとへ。結局、わたしが帰れる場所はあそこしかないのだから。

「……そうか」

夫の表情に安堵の色が浮かぶ。自然に浮かんだ笑みを目にして、自分が出した答えに間違いがないのだと知って嬉しくなる。

「今まで本当にありがとうございました」

心から愛していなかったかもしれない。でも、大切な人には変わらない。

ありがとう。そして……………ごめんなさい。

泣きそうなのを見られなくて、畳の上に額をこすりつけるように頭を下げた。

帰郷の日、お迎えには驚いたことに、彰子さんと正平さんが来てくれた。

てつきり女中の妙さんが来てくれるものだと思っていたから、驚きのあまり言葉が何も出てこなかった。

「本当に、申し訳ありません」

本当なら郡司家に戻るべきではないとわかっている。だけど、どうしてもあの家に帰りたい理由があった。もう一度、あの離れに住まわせて欲しいと手紙を書いた。

断られてもおかしくない。妾の娘の上、出戻りなんて最悪だ。針のむしろは覚悟の上だった。

だけど。

「莫迦ね」

ため息まじりに彰子さんは笑った。

「あなたの家でしょう」

戸惑うわたしの顔を見て、あなたは本当に莫迦ね、と呆れたよう

にくり返す。

「お前は何も気にしないでいいんだよ」

少し大人びたと思っていた正平さんは、少年のように無邪気に目を細める。

「お帰り、由比」

不覚だった。目頭が急に熱くなって、慌てて顔を伏せた。

「……ありがとうございます」

しばらく顔が上げられなかった。正平さん……正平兄さまは、わたしの頭をぐりぐりと撫でた。
小さな子供に戻ったような気がして、少しくすぐったい気分だった。

ずっと、一人ぼっちだと思っていた。

誰にも受け入れてもらえなくて、居場所なんかなくて、ずっと一人だと思っていた。

でも、周囲から背を向けていたのはわたしの方だったのかもしれない。
欲しかったものは、ずっとすぐそばにあったのだろうか。いじけて背を向けていたから、気が付かなかっただけで。

もっと早くこのことに気が付いていたら、わたしの人生も少しは違うものだったかもしれない。だからと言って、後悔はしていない。

こんなわたしだったからこそ、あの人——鬼と呼ばれるあの人に

会えたのだから。

わたしが帰郷を決めたのは、あの人に会いたいから。

帰ればあの人に会える。

もう命が長くないと知ってわかった。やっぱわたしの心を占めていたのは、どこか寂しげで妙に律儀な死人喰いと呼ばれる青年だったのだと。

汽車での長旅は、正平兄さまのどうでもいいような与太話のお陰で楽しいものとなった。

妙さんの用意してくれたというお弁当も美味しかった。嫁ぎ先から暇を出されて里帰りだということを、忘れてしまいそうなくらいだ。

正平兄さまは大学を卒業後、実家に戻って家業を継いだと話には聞いていた。

だけど、お嫁さんの方はまだのようだ。叔母さまの執拗な見合い話をどうやってかわしているのだろう。どうやら彰子さんの悩みの種となっているらしい。

「あなたももうすぐ三十でしょう。いい加減いい人を見つけて落ちて着いて欲しいものだわ」

「そんな話、今はもういいでしょう」

「いつまでそんな風だと千歳さんがうるさくてたまらないの」

そんな二人のやり取りがおかしくて、久しぶりに笑った。笑ってから、気が付いた。こうして心から笑うのは、何年ぶりだったろうと。

帰り道は本当に楽しいものだったけれど、身体にはずいぶん堪え

たようだ。駅から正平兄さまに抱えられて家路に着いた。

「ほら、由比。着いたぞ」

耳元で正平兄さまの声がして、ふっと目を覚ました。

蔽かな門をくぐった途端、視界が桜色に埋め尽くされる。いつのまにか桜の季節を迎えていたのだと、今になって気がついた。

「きれい」

薄紅色の桜は、今が一番の盛りのような。時折、ひらりと雪のように花びらが舞い散る。手のひらを差し出すと、引き寄せられるように一枚の花びらが、わたしの手のひらに納まった。

それを見ていた正平兄さまが、小さく笑った。

「きつとお前が戻ってきて桜も喜んでいるんだよ」

冗談めかした口調に、思わず苦笑した。

「そう……嬉しい」

「この樹ほどではないが、離れの桜もなかなか見ごたえがあるぞ。だから、後でゆっくり眺めるといい」

だから、おやすみ。

ぼん、と子供をあやすようにわたしの背中を叩く。

「はい……」

素直に頷くと、そっと瞼を閉じた。すると、あっという間に睡魔に引き込まれていった。

二十一 再会

誰かの声が聞こえる。

闇の向こうで、誰かが呼んでいるような気がした。

——誰？

「……？」

闇から浮かび上がるように、わたしは目を覚ました。

気が付くと、暖かい布団に身を横たえていた。もう夜なのか、辺りは暗い。次第に目が慣れてくると、障子の格子模様が薄っすらと浮かび上がってくる。

あれ……わたし……。

うつらうつらしながら、今の状況について考える。

さっきまで汽車に乗っていたはずだ。正平兄さまと、彰子さんと一緒に。たくさんお喋りをしながらお弁当を食べたりと、楽しかった。

あれは夢？ それとも……ここは。

そつと頬に、わたしの頬に触れている手。その手の感触が、今自分はどこにいるのか思い出させてくれる。

冷たい骨ばった手。わたしは、この手の持ち主を知っている。

ああ、やっぱりまだここにいたんだ。

ゆっくりと瞼を開く。

枕元で片膝をついて、わたしを見つめる漆黒の双眸。

会えた。ようやく会えた。

無意識だった。わたしは、ゆるゆると両手をあの人に向かって伸ばす。

触れたかった。あの人がここにいるのだと、もっと確かめたかった。

わたしの指先が冷たい肌に触れると、びくりと震える。手を振り払われることも、逃れてしまうこともない。触れてもいいのだと赦されたような気がして、恐る恐る、細い顎に触れる。少し乾いた唇、肉の薄い頬、鼻梁の通った鼻、長い目尻、確かめるように、ひとつひとつ丁寧に触れる。

「どうして戻ってきた」

彼の声には、苦しさが滲んでいた。今のわたしがこの人に再会するということは、どういう意味なのかわかっていた。だから、戻ってきてしまったわたしを責めているのだろう。

「だって」

宥めるように彼の頬を撫でると、にこりと笑って見せた。

「ここがわたしの家だもの」

冷たい頬がわなないた。泣いているような気がして、もつれた糸玉のような黒髪を指で梳く。

「それに……わたし」

会いたかった。

唇だけで、そつと呟く。

この人と交わした約束を果たさなければ。確かにそんな思いもあったけれど、それよりも、何よりも、わたしは——この人に会いたかったのだ。

「喰われるとわかっていての言葉か」

そんなこと、今さら言われなくてもわかっている。わたしは頷く代わりに微笑んだ。

「この……莫迦者が」

擦れた声は、今にも泣き出しそうに聞こえた。

「莫迦者が……」

力無く頂垂れてしまった彼の背に腕を回す。でも力が入らない腕では、この人を抱き締めることが叶わない。

背からずり落ちる腕を取ると、そのまま彼に引き寄せられる。

冷たい胸にそつと頬を寄せると、深い森のような匂いがした。彼の胸に身体を預けると、ぎこちなく抱き締められる。まるで壊れ物を扱うように。

会いたかった。

いつからこんな感情を抱いていたのかわからない。でも、こうして会えて嬉しく思う気持ちは確かなものだ。

「顔を、見せて……？」

この目にしっかりと焼き付けておきたかった。この人の顔を。わたしの懇願に応えるように腕の力が緩むと、顔を上げる。彼の頬に描かれた涙の筋を指先で拭くと、薄い唇にほんのりと笑みのようなものが浮かんだ。

もしかして初めて見る笑顔のような気がする。もつとちゃんと見たかったけれど、それは叶わなかった。その泣き笑いのような表情を見られたくないのか、そつぽを向いてしまう。その様子が子供っぽくて笑ってしまう。

「……お願いがあるの」

彼の横顔に向かって懇願する。

わたしが何を言おうとしているのか悟っていたのかもしれない。何度も躊躇いながら、ようやくこちらを向いてくれる。

「わたしが死んだら、ちゃんと」

食べてね。と続けようとした言葉は、冷たい唇によって封じられた。

たった一瞬の口付けだった。以前、一度だけ唇を重ねたことがある。でも、その時とはまったく違っていた。

「まだ死ぬな」

わたしの髪に顔を埋めると、やっと聞き取れるくらいの小さな声で囁く。

死ぬな。

この人からそんな言葉を聞くとは思ってもみなかった。

「どうして？」

好き好んで死肉を食んでいるわけではないと、何となく気が付いていた。そうじゃなかったら、あんなに苦しそうな顔をするわけがない。だから、この人が死んだ人間を喰らうのは、きっとわたしが理解できないような理由があるのだろう。

「ねえ、どうして……？」

わからない、と弱々しく頭を振ると、縋るようにわたしを抱き締める。

わたしの単純な疑問は、この人を追い詰めているのだと悟り、理由を問うのはやめようと思った。

「大丈夫」

彼に冷たい頬に、そつと自分の頬を寄せる。この人を安心させるように、穏やかに呟いた。

「まだすぐじゃないから大丈夫。……でも、ちゃんと食べてね」

返事はなかった。懇願するように、もう一度同じ言葉をくり返した。

「……わたしが死んだら、ちゃんと食べてね」

震える白い頬に口付けると、彼の瞳を覗き込む。

「そうすれば、あなたとずっと一緒にいられるから。あなたの血と

なって、肉となって、命となって、一緒にいられる。そんな気がするから」

長い沈黙の後、とうとう折れたように彼は静かに瞳を伏せる。

「お前に何かを願われるのは……これで二度目だな」

ぼつり、と呟く。

思ってみれば、わたしが誰かに願いごとを口にしたのは、この人にだけだった。

ひとつ目は話し相手になって欲しい、だったはず。あまり話し相手という感じではなかったけれど。

「……しかも最後の願いが、そんなこととは……お前は愚かだ」
「いいの」

自然に笑うことができた。

彼は愛しむように、ゆつくりとわたしの髪を撫でる。

「……お前が死んだら……残らず喰らい尽くす」

再び口付ける。さっきよりも長く深い口付けは、慈しむように優しいものだった。

ありがとう。

この人に逢わせてくれて……本当にありがとう。

この気持ちを、誰に伝えればいいのだろうか？

わからないけれど、何度も心の中でくり返す。「ありがとう」と。

「お前を喰らい尽くす。血の一滴も、髪的一本も……すべてだ」
「うん……」

きつと、今、わたしは幸せだ。

わたしたちの会話を他の人が聞いたら、どんなに恐ろしく思うだろう。

でも今のわたしにとって、この人がくれた言葉は、どんな愛の言葉よりも甘く胸に響いた。

終章（前書き）

これで完結です。

終章

かつて彼女は私の妻だった。

彼女は鬼籍に入るにはまだ十分過ぎるほど若かった。最初のお産で子を望めない体になってしまったが、男子が生まれていたら離縁にはならなかったかもしれない。

しかし、彼女が生んだ子は女子だった。死産だったと告げられていたが、本当は生きていると告げられたのは、彼女との離縁が決まってからだった。

本当に酷い話だと思うだろう。両親は息子の私すらも騙していたのだから。

しかし、そんな非道な行いをせずにはいられないほど、父や母は後継ぎとなる男子を切望していた。長男だった兄を病で亡くしてしまったからだろう。

だが、無情にも彼女と離縁する道を選んでしまったのは、私の心の弱さだ。言い訳のように聞こえるだろうが、周囲から散々説得され続け、私も抵抗するのに疲れてしまっていた。

もし、彼女が涙のひとつでも見せてくれれば……。いや、それはいい言い訳だ。

——今までありがとうございました。

彼女は素直に私の提案を受け入れてくれた。きっと彼女も、この家に身を置いているのが辛かったのだろう。最後にお辞儀をした妻の身体が、まるで少女のように頼りなく感じたことを、今でも覚えている。

「父さま、どうしたの？」

娘の声で我に返った。娘はもう十になっていた。

「ああ……すまない。少し考え事をしていたんだ」

娘の早季は妻によく似ている。妻によく似た、思慮深い瞳で私を見つめるたびに、僅かばかりの苦い後悔がさざ波のように押し寄せる。

妻の墓は小高い山の頂へ向かう途中にある寺にあった。数百年の樹齢を過ぎた木々に囲まれた古寺は、妻の実家の一族が代々眠っている。

しかし、妻の墓だけは寺の片隅に追いやられるように、ひっそりと佇んでいた。

出戻りの娘で、しかも彼女は私生児だった。

墓地の片隅に追いやられた彼女の墓を見るのは辛かった。

さらに、自分の幸せを見せ付けに行くような気がして、正直なところ行くのをやめようかと思ったくらいだ。

——大丈夫。きっと由比は喜んでくれるから。

背を押してくれたのは、彼女の兄であり、わたしの友人でもある男だった。

彼との付き合いは、細々とはあるが今も続いている。

緑に囲まれた歩道の苔むした石畳を踏みしめる。

ここは無音に近い。足音も息遣いも、すべて木々の中へと吸い込まれていくようだ。すべらないように、足元を見ながら歩き続けていると、ふと、人の気配に気が付いた。

顔を上げると、前方から笠をかぶった僧衣姿の男が坂道を登ってくるどころだった

一瞬老僧かと思ったが、まだ若い坊主のようだ。

修行の身なのだろう。彼が身につけた墨染めの衣は、灰色に色褪せ、襷袢布をまとっていると言っても過言ではない。

坊主姿の青年は、私たち親子に気づいたように軽く会釈をする。私も会釈を返し、そのまますれ違う——はずだった。

「お坊さま、どちらへいらっしゃるのですか？」

早季が無邪気に訊ねた。坊主の青年は、早季と目線を合わせるようにしゃがみ込む。

「これから、大切な人に会いに行くのですよ」

「わあ、早季もです。さっき行ってきたところなのですよ」

早季も、柔らかい頬を桜色に染めて満面の笑顔を浮かべた。

「こら早季。お坊さまの邪魔をしてはいけないよ。……………申し訳ございません」

すると若い僧侶は柔らかく頭を振ると、早季の頭を撫でた。

「可愛らしいお嬢さんですね」

「ありがとうございます」

「今日は、奥さまのお参りでしたか？」

「……………ああ、ご存知でしたか」

年に何度も訪れていないが、どうやら顔を覚えられていたらしい。

「実はこの春、再婚することになりました……」

今日私が訪れたのは再婚の報告のためだった。

桜が咲き誇る頃、私は二度目の祝言をあげることが決まっていた。一刻も早くと急かす両親を何とか説き伏せながら、よくもこんなに引き伸ばせたものだ和我ながら思う。

「きっと、奥さまもご安心なさることでしょう」

「ありがとうございます。お坊さまにそう言っていただけると気が楽になります」

友人にも同じようなことを言われていたが、やはり僧侶に言われた方が信憑性があるように思えてしまう。

ふと、その友人が奇妙な話を聞かせてくれたのを思い出した。

「そういえば、お坊さまはご存知でしょうか？」

彼女の一族にまつわる不思議な話を、わたしは若い僧侶に語った。亡くなった人を一晚家に留めておくと、無残に鬼に喰われてしまうという恐ろしい話だった。

でもそれは単なる教訓じみた言い伝えで、そのような出来事など起きる訳がないと聞いていた。

「しかし。妻の亡骸は……消えたそうです」

跡形もなく彼女の亡骸は消えていたという。

正確には、亡骸だったのかわからない。だが、すでに医者から匙を投げられていた彼女は、いつ死んでもおかしくなかった状態だったという。

もし逃げ出していたとしても、いや……そんな状態で逃げ出すことなど不可能に近いだろう。

それにもし、本当に彼女自身が逃げ出していたとしても、間違いなく生きてはいられない。

彼女の亡骸が今だ見つからないのは、野犬に食われてしまったか、もしくは海に流されてしまったかは、誰にもわからない。

彼女の墓が空っぽだと知っているのは、彼女の一族の者でも極わずかだという。私も友人に告げられたものの、誰にも話したことなくかった。

「すみません。おかしい話をしてしまいました……」

なのに、なぜよく知りもしない僧侶などに話してしまったのだろう。

「いえ……」

しかし若い僧侶は驚くでもなく、私の奇妙な話に静かに耳を傾けてくれた。

「奥様のために、念仏を上げさせてください」

穏やかに目を細めると、若い僧侶は静かに手を合わせた。

「ありがとうございます」

「……あなたも、どうか新しい奥さまとお幸せに」

「はい……」

私は感謝の気持ちを込めて、深々と頭を下げる。しかし、顔を上

げた時には、すでに若い僧侶の姿はなかった。

「お坊さま？」

私は慌てて辺りを見渡す。

一本しかない山道だ。どんなに早足だとしても、すぐに姿を見失うわけがない。

「夢、だったのか……？」

白昼夢？ いや、そんな莫迦な。

私は軽く頭を振ると、早季子が私の袖を引いた。

「父さま？」

「いや……なんでもないよ。さあ、帰ろうか」

「はい」

元気良く返事をする早季子の小さな手を、わたしはしっかりと握り締めた。

—
おわり
—

終章（後書き）

長く掛かってしまいましたが、これにて完結です。
最後までお付き合い下さった皆様、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2537q/>

死人喰いの鬼

2011年11月23日19時55分発行